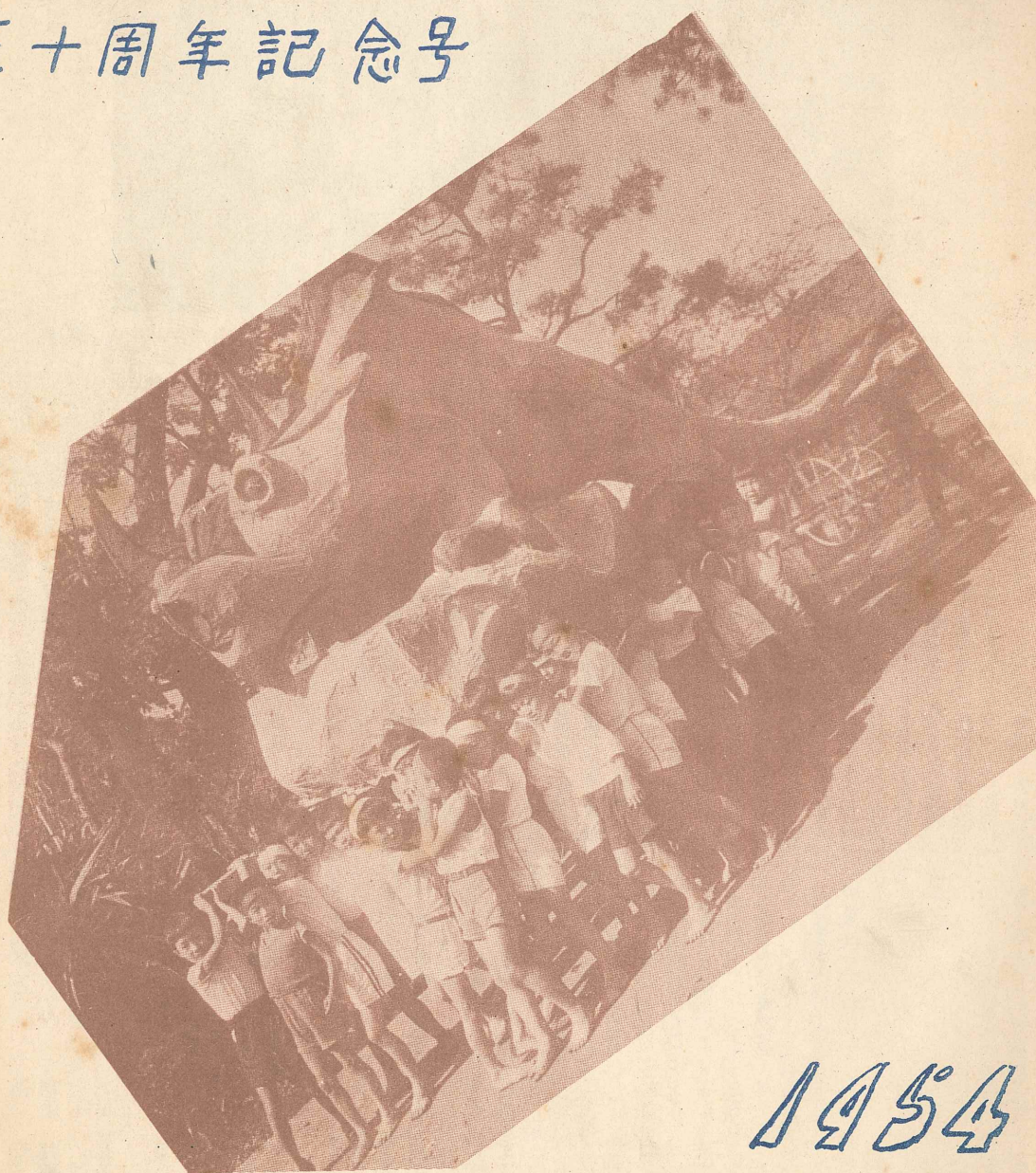


明星学園 R.A 会報

三十周年記念号



1954

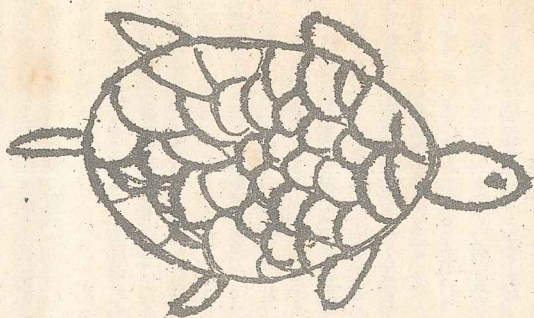
明星学園父母と友誼の会



万又三唱（壇上は高田会長）

創立三十周年 目次 記念特集号

私の感想	会長 高田止戈夫 9	総会に出席して	西村 郁子 35
お礼に代えて	理事長 赤井 米吉 2	功勞?	恩地 邦郎 36
式典に因んで	熊井猪一郎 4	成果は偶然に生れなし	山本 茂 36
思い出	山本 徳行 6	明星ッ子	小山 力孝 39
明星学校ボロ学校	宮崎 吉則 7	三十周年記念式典のありさま	慰靈祭のありさま 40
ある休みの日の事	上田八一郎 8		
三十周年と私	照井 げん 10		
記念式典に参列して			
神田五雄 11	古田泰彦 11	明星学園創立三十周年記念表彰者	4
崎昭子 12	中一の母 12	未賓祝辞から	6
景子 13	閑庭の母 13	各地よりの祝電	14
歴史は尊い	原田満寿郎 14	参列者のことば	41
追想の明星	金子金次郎 17	慰靈祭の雑感	42
偉い出のまゝに	多湖 実輝 18	慰靈祭日の感想をお父さま、お母さまに	42
明星と私	船山 博彦 19	二人の兄の戦死	江川 玄武 43
土足であがる女学校	山岡 幸子 19	慰靈祭に参列して	岩崎 允子 44
在学時代の思い出	橋川 尚 19	お祝のことば	黒頭 巾 44
ツバキと稻	松田 茂 20		
お化けの世界	坂田 寛 21		
思い出によせて	霜田 光一 21		
日の目を委ないでいた言葉	模本ナナ子 21	詩歌	
思いつくまゝ	福沢 慧 22	祝歌	8
みな学園のおかげです	白地 米蔵 23	祝典	山口 晴子 10
その日の思い出	ある母より 24	三十周年を祝して	11
一つ一つの思い出	福録 忠恕 25	武蔵野	高松 芳江 15
瓶がかつた日々より	戸坂 汎子 27	潮千紘	石田ひさ子 17
井の中の蛙	小林 貞子 28	心崩れてあれば	まさ子 20
明星ッ子は幸福	萩野真佐男 29	みたまようけ	40
三つの言葉	原田 麻耶 30	明星に	42
いたすら	西野入尚一 30	みたままつり	45
喜びの日を前に	清田 宏子 31		
星のまたたき	大島 信子 32		
今こそ天皇を敬愛せよ	武者宗一郎 33		
御苦勞を思つて	久保田高明 34		
先生方へ	けし 粒 34		
思い出	鹿島 茂男 35		
		編集後記	45
		表紙	S・Y 生
		製版者	山村 亨



今泉紀子 (のり)

三十周年記念 式典のありさま

どんより曇つた晩春の一日、昭和二十九年五月十六日、日曜、午後一時から、学園の創立三十周年をこゝろにおく記念式典が同校小中運動場であつた。

新校舎の北側に蒼空色に塗つた大きな衝立が立てられ、その衝立の前に、赤茶色のテーブルクロスをかけた机が二つ、白い踏台の上に設け

られ、机の上にはテープレコーダーを仕込んだマイク・ロホンが立つてゐる。

そしてこの机を中心に向つて右側にPTA代表や明星会長、明星会の椅子、左側に面校長と理事側の椅子が肩の横にならび、表彰者席や一般参列者の椅子は、その前に数列に広く設けられてゐる。

また学校側席と衝立との間には、ピアノを中心バイオリン、アコーテオン、木琴、鉄琴、笛などを持った生徒音楽隊が、いまや遅しと式の始まるのをまつてゐる。

これが式場設備の有様である。いよいよ時間が来た。拡声機がそれを告げた。

胸に赤、白、青などのリボンをつけた来賓や先生や一般参列者が、ぞくぞくと各自の席に詰めかける。席を得られなかつた人々は、参列者席のうしろに立ち群がっている。この数ザツと四百名。

代表者席の大きな白バラを胸につけた赤井理事長をはじめ、照井、上田面校長今日の顔——特別に生々と輝いて見える。理事長や校長が来賓と交す握手の姿も式場風景にはほぼ

之ましい。

小笠原先生は踏台にかけ上り、勢よく指揮棒を振り始めた。

奏音が式場内一ぱいに響きわたる。新作「祝う歌」を父兄側もみんな元気で合唱するありさまは、明星ならこそ之感を与える。

やがて赤井理事長がフロック姿、ゆうゆうと壇上に立つ。声は低いが落付いて句切の明瞭な理事長の話は、場内のすみずみまで行きとどく。聴衆は水を打つた様に静まり、一語も聞き流さじと、みんな聞き耳を立ててゐる。(理事長の挨拶は別稿)

続いて小原玉川太学長登壇するや、理事長はユーモアなつぷりで学長を紹介する。ところが学長の声がない。見ると学長は、目に涙を一ぱいたたえて幾度も幾度もハンカチーフで涙をふきながら立つてゐる。やがてようやく学長は、親友赤井君の為にと云いながら、感激と熱誠のこもつた祝詞をのべはじめたが、声は時々かすめる。誠の力はおそろしい。聴衆の目にもいつか銀粒が光り、腰をのりだして学長の話に聞き入る。(学長の話は別稿)

つぎに立つたのは、明星学苑の児玉九十先生、高田PTA会長と福沢明星会代表ついで壇にのぼつて、それぞれ祝詞をのべた。それから祝電の披露と仙台からわざわざ長距離電話の祝詞「あと五十年と百年だ」の報告がある。功労者表彰はそのつぎにあげられた。最初に茶郷夫人、六十才位の上

品な落付いた老婦人。つぎが山之内夫人、暗紫色の着物に白い鳩の縫いとつた帯をしめたいかにも静かな夫人。そのつぎが箔鉄色の羽織を着て、眼鏡の井野夫人、朱簾功労者の一番最後が市村夫人。鉄色の紋付に白い編み様の帯をしめ、眼鏡をかけていられたが、細身で弱々しく感ぜられたが、たぶん病軀をおしての出席であらう。

それらの人々は拡声機によつて一人一人呼びだされ、理事長から表彰状と記念品を受けるのである。その都度万雷の如き拍手がおきる。

照井大妻面先生が理事長の前に立たれた時は、それでした万場割れるような大拍手が四方から湧き上つた。

つぎは勳統職員に対する表彰。拡声機は「三十年照井精一郎殿、同照井げん殿。」と次々と呼出す。この代表として照井校長が表彰状と記念品を一括して受取る。それからみんなで校歌合唱。赤井、照井、上田の諸先生も実につれしげに唱つてゐた。

最後に高田会長の音頭で万歳三唱。ここに盛典の幕をめでたくとじた。時に午後三時。





お礼に代えて

糸井 米吉

明星学園は創立の当初から、ここに幼くものとここに子弟を各々される父兄の方々と共同の経営体として発達してきています。このことを大正十三年六月二十一日、学園開校後約一ヶ月して開校披露式をあげた時の式辞の中で、こういう風に表現しています。

「学園はわたくしが設立者ということになつていきます。しかしこれは法律上の主統でありまして、わたくし一人の設立したものではありません。照井夫妻、山本君の四人が一心同体で経営して行くのであります。がこの四人でも経営できません。この四人はここで仕事をするもので、この経営はわたくし共の陰にかくれて絶大な援助をして下さる人によつてなされているのであります。その人は名を出すことを好まれません。

ので、暫くかくれた人としておかねばなりません。むしろその人も自分の学園を作るつもりで助けて下さっているのではありません。この国、この社会の一教育機関を作るつもりで居られるのであります。これは全くこの社会のものであります。この教育機関を利用してわが子を教育しようと思われ方は、何人でもこれを利用することが出来ます。わたくし共には一箇の教育上の理想があります。この理想を実現するために新しい学園を建てるのが必要であると思つて、ここに建てたのであります。しかしわたくし共の理想はわたくし共の私かな考えではありません。わたくし共はこの理想はわが国社会の理想であると信じています。この理想によつてわが国社会の必要とする人物を養成しようと思

うのであります。かく経営においても、教育においても、ここはわれわれのわが優勝手をするところではなく、わが国社会の一教育機関で、わたくし共は暫くここに幼くものであります。だから、「私立」といわれますが、むしろ「公立」ではありません。いわば「社会立」であります。……この意味において、御来会の各位に將來この学園の成長発達に対して深い御関心を持たれんことを希うのは、敢てわたくし共への御援助を希う私的な布いではなく、わが国社会の発展を助ける「公」の義務であることを訴えたいのであります。

しかし学園に直接関係のない人々の援助はそう多くなく、あつたものも大抵は父兄の方々の手引きでありました。この式辞にいつたかくれた人故糸井米吉さんは父兄であつたし、その右力を加えられた故山之内共十郎さん、故井野正次郎さん、故市村今朝蔵さんなどもつてした。その内に学園後援会ができて全父兄の方々が會員になつて、中等部の開設を計つて下さつたのであります。だから記念式に感謝をお送りした四方は全父兄の代表のような意味をもつもので、これらの方々におれをいふと共に、過去及び現在の全父兄の方々に、「有難うございました」と心からのお礼を申し上げるわけです。しかし父兄の方々は児童生徒が卒業すれば、一応縁が切れるわけであつたので、その時々新しい父兄にたよつて行かなくてはなりません。

他方教職員は新旧の別なく同人として働いていたと思いますが、それも或年限が過ぎると、若い諸君は他に発展の道を求めて去られるので、われわれの同人陣も永久的なものではなりません。その間を一貫した理想と方針をもつて、伝統を伝えつつ発展を計つて行くには、その中心となるものがあらねばならなかつたのです。それをなしたのが創立以來三十年つづいておられる照井先生と、中等部開設の前年に加つて二十七年つづいておられる上田先生でありました。ここにわたくしが追いつめられたので、両先生はこの功績はさらに大きく評価せられねばなりません。むしろこれも過去現在の教職員諸君の支度があつたればこそ、両先生の功績をたええと共に、凡ての教職員の方々に「有難うございました」といねばなりません。

○

われわれの学園は大正時代の新教育運動の一つの大きな拠点であつた成城小学校から、分れて出たのであります。したがつてここに置かれた故沢柳政太郎先生の教育の種が、ここにもつづいて植えられたのであります。創立二年のはじめに、先生から頂いたお手紙には、「うあります。」「拝啓、明星創立はや一年、光陰矢

の如しとは異にその通りと存じます。誠心誠意努力する事は第一ですが、方法も大切で、成城の如きも研究の方法、異地教育の方法に於て世間の学校の如く頗る不十分の所が多いと存じます。実験的科学的の方法が欠けては十分の効果を挙げ得ないと思存じます。その辺について一層努力を希望します。児童数の増加は結構ですが、余り順調過ぎるかと思存じます。初めは辛抱する時期を経過したいと思存位です。自然に来るのでなくはいけないと思存します。人員よりも教育の実績実績を第一として進まれんことを。左すれば必ず強になります。名の響れんよりは実の場らんことを希望します。」

成城の教育目標は「個性の教育」「自然に親しむ教育」「心情の教育」「科学的実験的教育方法」の四つでありました。われわれが井の頭公園の股にこの地を卜したのは、この第二の要件にみたすためであります。このことは創立趣旨に強く記されてあります。後年鶴田君がニールの教育法を紹介したのをわれわれが支持したのは、第三の要件をみたす最も進んだ方法であると思存したからです。「個性の教育」がわれわれにおいても第一であつたことはいまでもありません。

第四の「実験的科学的的方法」は沢橋先生が常に唱えておられたことで、京大総長をお止めになつた時、終生の事業として実験学校成城小学校をおはじめになつたのです。われわれ

はここに一組三十人の少数の児童を置いてに仕事をしておりました。われわれはこれをわが国の一十数百万の児童の代表と心得て取組んでまいりました。それらを通じてわが国の教育を科学とし、技術を確立したいと思存したのである。この熱心も沢橋先生からうけつたものであります。先生が明星に來られる際には、吾等寺の駅前でビーナッツの枝を買つて来て、それを昼食にしておられました。ウ



ドン一杯すらとり寄せるところのないこの辺であることを承知しておられたのです。久し振りにお出になつた先生のお話をききたいとよりそうわれわれに、「子供たちと一しよに食事をせよ」といわれたあの教育熱と児童愛は今も頭のごるものがあります。

照井君の「新説本」の編集、自然科の究明、原田君の社会科の先駆としての郷土研究、山本君の「読解力」のスケール」の研究、鶴田君の精神衛生の研究、高橋君の体操の研究などはわが国の初等教育に波紋をえがかせたものです。岡君の総合数学の

試み、多湖君の生物学は二十数年前に既に今日のそれらのような響きにたつて教授したのである。前島君の「体力テスト」は期界の権威吉田章信さんの博士論文の資料になつています。何れも日本新教育の先駆的役割を果たしたものです。

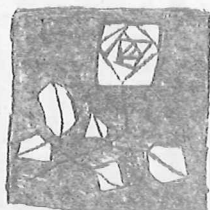
昭和八年に中、文学部の第一回生を出して、創業の仕事が一応完成したまでが、学園の第二期です。大正時代の新教育運動は大体このあたりで行きなやみになつていきます。世界においてもそうでした。これらの諸研究も大体この間になされたものです。それからわが国全体が戦時色になつてゆき、教育も次第に衰へて行きました。中学校では軍事教練の重さがいよいよ加わつてきました。卒業生は十回生までの約十年が第二期になります。それから戦後の混沌の中に、新制小・中・高がつかられ、児童生徒数が急激にばう張して今日のようなつたのです。この約十年が第三期です。かように見ますと、この三十年はほぼ十年を一期として、非常に様相の異つた三期が副されていきます。これを詳しく書いたら、近代日本教育史の顯著な編図がかかれようと思存します。

創立の当初、一切の経費を負担して頂いた故系郷さん、朝野で金山を経営しておられたのでありますが、この方には第六感をたからせる微

妙な靈力がありました。ある時わたくしの顔を上げれば眺めながら、額のすじが中途でできるところのあるのをさして、「この仕事は完成することにはなつてゐるが、お前は中途でこの仕事からはなれる相がある」といわれました。その時はそんなに気がけなかつたのですが、終戦後出版になりました。永い間、学園へ出入りし止めの身分になつた時、何か見えないう運命の中にひきずられてゐるように思つて、そつとしたことです。

どうにか許されて学園へ帰り、三十年を皆さまで共に祝ふことができたのは、わたくしの限りなくよろこびとするところですが、戦後の大難な時をはなれておらねばならなかつたのは、何とも申訳のないことだつたとおわびいたすと共に、反つてより大なるものにせられた照井・上田両先生の御苦勞、これを支持された教職員諸君、PTAの会長その他の役員の方々、皆様におかれのお礼をもう一度申し上げます。

(写真は赤井理事長)



明星學園創立
三十周年記念
表彰者

學園功勞者 茶鄉 基氏遺族

并野正次郎氏遺族

山之内兵十郎氏遺族

市村今朝蔵氏遺族

勤続員

三十年勤統

"

二十七年

二十年”

十六年”

十五五

五五五

二十二年

一十一年

十一年

十年

十年

永年

11

11

白地	多湖	杉山	樹川	横川	田口	山岡	恩地	船山	橘	原田	上田	照井	照井
米蔵氏	泉輝氏	清氏	尚氏	武氏	武丸氏	幸子氏	邦郎氏	博彦氏	正薫氏	壽壽郎氏	八一郎氏	けん氏	一朗氏



式典に因んで

照井猪一郎

明星学園三十周年に當つて何か思

い出話などの幸でしたが、これは幸が不幸が学園の案山子になつて三十年、ここから一歩もはなれ得なかつたこの私にふさわしい儀礼的ご注文であるのでしよう。

その意味では私はたしかに明星に治まてゐる記録であるし、年代表でもあるのだから、価値の有無は別にして資料には争かきますまい。しかしいざとなつて見ると、これぞといつて人様に語り残す何物もないのに今更うんざりします。

よつに、この長い間、朝から晩までいや夜から夜まで大勢の子供を背中にくりつけ、せかせか動きまわつた記憶だけが、今になまなましくつづいて居ります。それは現在の同僚諸公も同じ宿命の道を辿りつつありましよう。

教育の実態というものは、こうした地味な苦勞なもので、決して在間に通りのよい派手なものではなさそうです。せめてこうした機会にスッキリした話題を持ち寄つて慰め合い、

願まし合いたいものです。

一押しなつて万骨枯れるような景
気のいいお話が、公の席では案外大
向うに持てることは通り相場です。

私に常に思ひます。過去は尊いが
現実は一層尊いと。過去の事実は修
飾したり歪曲したりすることも出来
ましよう。が、現実のそれに目を蔽
つことは絶対に出来ないし、また蔽
うべきものでもありません。

私が明星に三十年いたといふことは何の自慢にもなりません。せめて現在の同僚達の手足まといにならないう。明日が日からこの道のどんな歩み方をしたらいいかという事は、私としてのつぎきなため諒議なのであります。私はこの事のために悶えつづけております。頼つたれつつあります。

学園にとつても三十周年はたしかに延びて行く荻竹の一節でありましよう。しかし三十一周年であらうと二周年であらうと、たえまなしにその重みのひしびしとかかってくるのは、現販員の肩の上であります。直轄責任のない過去の功罪をすら現

在の仕事の上にさし加えて貢わされている現狀であります。私の如きは自分にかかつたはね火を子供の藤に払い落すような存在でしかありません。今更めかしく昔話をしたところ、それは決して新しい世代の人達を感奮させる糧にはなりません。そこで——明星の発祥にもその動機にも少しの神話も奇蹟もありませんでした。そのことは決して悼りよかりの野心からでも、野に立つ使徒の祈りからでもなく、それは過くべからざる或一つの偶然からであります。

今思へば極端無謂な出度であつたかも知れませんが、充分吟味しておかつたら、葡萄汁にて或は五人の同志のためかも知れません。最初五人の同志の中、間隙になつて一人脱落したのもそのためでしたでしょう。でもわれわれは必死でありました。

われわれは明星の新しい光足のために何から何まで、新らしく作り出さなければなりません。すべては創意と独創の上に着想された工夫されなければ満足出来ません。燃えこがった新たな情熱のわが心です。

われわれは、われわれの教育理想も方法もすべてこの記念のゆから生じました。哲学から出発したのも宗教から発願したのもなかなかたのです。すべては必要と必然の果際の中から少しづつ原理をさがし出し、克明にそれを積み上げて歩んで来たというこの方は、私を気軽に

させる告白であります。

明星の過去を知っている人達の多くがまだ健在している以上、私達は謙虚さを失つてはなりません。私もその責任ある一人でありませんが、私達は三千人に近い子弟を尊い実験資料にしながら、また何等まとまつた教育報告——本当の意味での報告を出すことの出来なかつたことを恥じ恐れます。しかも送り出した人達は今現に社会に働いています。教育という仕事はその人、一人にとつてはやり直しも取り返しも出来ない一度きりの仕事なので、この奥では恐ろしいまでに厳肅なものなのです。

私達の現在にとつて何より必要なことは、古い物語に酔いしれる事ではありません。固く手を組み合つて語り傳へる現職員諸公の夢と痛いと刷り合ひと援け合ひの実現であります。すべては人の子をあやまらなないための絶えざる願いと祈りのための精進であります。それなのに私達は常に貧しいのであります。幸い私達の誰一人現在に満足し、或は自惚れている者はありません。と云つて誰一人失望している者もありません。私達にとつて何より大切なことは裸になつて教育の實際と取組むことです。さらにびやかな能衣裳も決して悪いとは思いませんが、遅いギリギリや彫刻の眞実性こそ私達のこの願う人間像であります。われわれは絶えず皆さんに訴えたい多くの物を持つては居りますが、話し下手は私達を癡病にします。美辞・麗句、さつ

したものは古い時代にあつては教養の象徴であつたかも知れませんが、今の私達には死んだ言葉ですが……もちろん充分に洗練された言葉は相手を満足させるに充分なものです。しかしそれにはその底にひそむ眞実と誠意を絶対に必要とします。言葉を手を添へて伴わないよりは、意圖を言葉足らない方が遙かに聞く人を動かします。感傷と云ふことも人間に大切な情緒の表現の一つの源泉であります。併し私達は安っぽい感傷と詠嘆の中に子供達を、親達を浸そうとしたら大きなまちがいです。強い信念の下、悔いなき今日を送り、確信のある明日を迎えるための努力こそ周囲が私達に期待もし切望もするところであることをヒシヒシと身にこたえております。

明星三十周年式典の万々は優古に陶醉するためのものではなくて、遅ましい総意と総力に推進するべき新しいスタートへの序章であつたのであります。

若葉の庭をどよもすあの熱狂的歡呼は絶対に私達の逡巡や後退を許さない切望の雄たけびでした。私は私の中の自責に突当つた一瞬、ごながら深山の奥に黙想するような冷静の中におかれました。明日からの明星はどんな人達によつて支持され、どんな人達によつて育成されるべきか、何をとりたて、肝心の教育の本質が薄脱けになつてはいけません。「ほめられる」とか「愛される」と私は私達の直接目標ではありません。

達のわらひは私達自身の中にふくらみつつあります。それは教育の一般性の上に誠実に根をおろし、どこにも誰にも納得のいくような科学性的ある眞の教育をこの胚場に打立てることであります。あらん限りの精進を打ちこむことです。決して観念の幽霊や空念佛に終つては（け）ません。

教育という仕事は中々実体のつかみにくい仕事ですので、ややもすればこの空念佛や空手形にその日を送りやすい恐れがあります。計畧だおれにならないよう、一つづついいからこれだといふものを打ち出して見せることです。説明の必要のない争突に訴えることです。

よく父兄にたづねられる言葉の一つに「明星の背景とは何か？」といふことがあります。父兄どころか、当争者のわれわれ同志ですが、しばしばそうした吟味をし直さなければならぬ実状です。

何も無いといへばこちらは謙遜のつもりでも聞く方では無責任にとれるし、教育基本法は充分私達の奥底を表現してくれてるといへば、あまりに「ひとの何やらで角力」的に聞えるし、「強く、正しく、朗らかに」の標語はあるが、それだけでは深遠すぎてわかつたやうでわからない。さりとて世話して上げた子を見たらわかるとなると、いささか疑問を感じて来ます。

背骨とはこれですとほつきり見せるということは、心臓を掴み出して見せることよりむずかしいことです。

と云つて見せなければ父兄が、舌間が、納得するはずがありません。どうしても私達はこの祝典を契機に決意を新たに、総動員してこの青い鳥をつかまへ、いつでも誰にでも持出して見せられるようにしなければなりません。

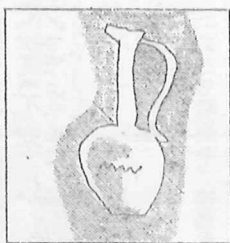
そのカギは只一つ、それは眞剣に子供の中に生き抜く仕事を通してだけあります。ある時ふと私の尊敬する父兄におくつた愚作に

佛とも鬼ともなりて人の子に
さざげんと祈る貪しき心

というのがありますが、今この頃を終るに当り、

よしとだにいわるゝはつらし、
いわるゝは悲し、いかに生くべき

だが教育者は総てに強くなければなりません。



思ひ出

山本徳行

関東地方を襲った未曾有の震災、あの震災の申し子として、この明星学園が生れた。

学園の敷地を見に行かれた赤井先生が、「井の頭森には明星が輝いていた。神秘そのものだつた」「新しい校々の学園も明星としよう。」と云われた。

爾来三十年、教育界の明星として、動搖なき地歩をしめる明星学園。

それから、武蔵野のまん中の島の中に「明星学園建設敷地」の標杭をたてたのでした。あの頃の学園の周囲は、全くの原っぱでした。夜などは淋しくて通れない程でした。井の頭もおちつた静かな公園でした。池には水蓮が咲き、大きな鯉が泳いでいました。行人もまばらに——御殿山の青嵐がとて物すごい色をしていました。

校舎もない私共でしたが、生徒募集のビラを配りました。

赤井先生も、照井両先生も、あの頃はまだまだ若かつた。私もまだ二十八歳の青年でした。正直に云うと、淋しい私共でした。しかし希望に燃え、意気に輝いていた。今の私だったら、こうもしただろうにと思うが、未熟ながら燃え燃える熱情は、尊いものでした。

震災復興途上にある大東京の、場末の建物は、遅々としてしかどらなかつた。もどかしいもどかしい毎日でした。そして五月十五日、職員四名、生徒二十余名で開校式をあげたのでした。折悪しく雨でした。照井君が幕を借りて来て囲を作りました。御席下さつた薄柳博士の頭の上げ、ポツリと雨滴がおちかかります。「こりやひどいなア」と見上げられました。屋根が出来上つていないのでした。みじめな開校式でした。

それでも私達は希望に眼を輝かせていました。校舎のない私達には、公園の森が教室でした。栗の花が甘い香気を送っていました。ボケの花がとても美しかったです。ボケの花がとても美しかったです。ボケの花がとても美しかったです。

校庭に花壇を作ったり、鳥籠をついたり。——その中にすべり台も出ました。全校生徒が、日向ぼっこ

をしながら昼食もたべました。赤井園長を中心に、全校生徒が円く並んで朝礼を致したものでした。小さい円でした。

かくて学園が生れたのでした。私はこの創立から最初の四ヶ年間御世話になりました。

思い出の昔はなべて美しい。苦しかったことも、悲しかったことも、また淋しかったことも。

今では全校一千人の太学園と承ります。今昔の感また一入です。

当時教育原書の輪読を指導して下さつた赤井先生、一緒に小使室の火箸やバケツなどを買いに行つた照井先生、そして学園の皆様方——御覧展をはるかに祈りいたします。

（山本先生は、赤井先生、照井先生御夫妻とともに、明星を創設された方で、現在、愛媛県今治市明德高等学校長をしております）

明星モットー

強く——

正しく——

朗らかに——

来賓祝辞から

渡辺三平市長

〇三男三女とも明星卒、理事長の言葉をかかれれば、学園の大株主の一人で、大のファン、氏の祝辞は総理大臣・文部大臣などよりはよほど嬉しいという。

三十年の努力により、今日を迎えられた学園に対し、私は隠しきれない喜びを感じずる一人である。赤井先生のお話で、土壌を求めて三平に学園の地を選んだといわれるが、全く創立当時はこんな寒村によくと思つたほどである。しかし、その後三平の村も発展して市制を施くようになり、学園も今日の盛大をなしたことは、同慶に耐えない次第である。学園発展の所以は、自由の立場において個性の伸張を計る愛の教育にあるので、私もこれに心から賛同し、又から次と子供のお世話に励み、又から次今後ますます名実共に完備発展されることを祈つて止みません。

小原玉川大学々長

〇赤井理事長と奥は異にながらも志を同じくして私学経営に尽してこられた氏は、声浪共に下る心からの祝辞を送べられた。

明星学園が今年三十周年の式典を挙

明星學校
ボロ學校

宮崎吉則

(学園理事小の父)

「官崎理事は身体不自由児の学校病院・職業指導所を経営され、御多忙の中なので、談話を編集部の責任に於て筆記しました。」

ある時、子供が「明星学校」ボロ
学校 入つてみたら いい学校」と
歌うともなく口ずさんでいるのを耳
にしました。これは聞く人の立場で
いうらうにとれる言葉ではないでし
ょうか。私も、父兄の一人として、
またそこが選ばれた学園の評議員
・理事という経営側の二人として
強く考えさせられました。「誰がそ
んなことをいうのだ」と聞いた私の
のケシマクが強かつたせいか、「皆
言つてるよ」と答えた子供は、その
後私の前では歌いませんが、三下周

年というおめでたい日に、この言葉は考えてみる必要があります。

ッ、つてみたら、いい学校」といふのは、三十周年を迎えて、その長い間に流れてゐる開設者・販賣・父兄・児童生徒の努力が、リつばに実を結んでゐることを端的にものがたつてゐます。今日の慰霊祭に参列してみしても、実に入りつぱです。いわゆる宗教家の手をはかりた形式ばかりの式典には何處も出たことがありませんが、簡素ながらこれほど胸を打たれるようなお祭りは他では見られません。これも先生方が学校を大切に、児童生徒を深く愛してゐるその気持がしみじみと現れてゐるからです。私自身が子供を皆明星に入れて、小学校から高校まで教育をうけさせようと思つてゐるのは、こんなにいい学校」だからです。

しかし「明星学校」ボロ学校にいたつては問題です。学校というものが、いい先生、いい教育だけではない。たまた、経営が大切だということを痛感させます。ことに戦争から敗戦、独立後の日本の経済的な苦しさは、この経費の比重をましてききました。私自身が幼稚園から、小

中・高校を他で経営しているからよく分りますが、明星ほどいい先生が集つてゐる学校はなかなかありません。けれども、今日の経済情勢の中で、いくらいい先生だつて露を食べていられるわけのものではありません。またいい設備をもたなければ、本当にいい教育をして頂くこともできません。何としてでも、いい先生方に生活の心配なく、いい設備を利用して、もつとよい教育をして頂きたい。経営者の一人としても父兄としても私はこの事を、今日の記念の日に至る皆さんにも御一緒に考へて頂きたいと思ひます。もちろん、日本の今の経済の中で父兄の方も同様苦しいのです。けれども、どれほど財産を残しても、今のいわば生地獄のような世の中に子どもをほうり出しておいて何になるでしょう。せめて、教育の場を私たちが父兄の力によりよくしていつて、次の世の中をよくしていく、子供たちの時代を楽にしてやる、そのためになら私たちが自身が多少の苦しさをお忍びでいかなければならないはずだ。

三十周年という記念の年が一つの発足の年になつて、明星学園を誰が見ても本當に「いい学校」にするし「ことを積極的にやらなくてはいいけません。これについては、理事・父兄・販賣の三者が一体になつてはじめてなしとげられることです。理事も力を合はせる、この協力で以て、明星学校、いい学校、入つてみたらなおいい学校」にして行くのではあ

けられたことは慶賀に耐えない。私學経営の困難を体験している私は痛切にその間の労苦を思い、慶祝の声を大にするものである。ここに、井理事長とは共に明治二十年生れの友であり、上田校長とは同じ寄宿舎に学生生活を送った仲であるので、今日の感懐は他人争とは思ひがたない。いうまでもなく、私学はその経営のすべてが親の子に対する愛によつて支えられ、経営者の教育における信によつて培れている。この真が官公立校と全くちがう所である。教育の根源は愛であり、愛のない所に真の教育はあり得ない。従つて私学の父兄は大いにスライドをもつて、学園の発展を助けられたい。

兕王明學苑々長

○メイセイ・ミヨウジウ、訓はちがうが同名でしかも近所の為、時折互にまちがえられる仲なので、その名の由来などユーモアまじり（笑）の言葉があつた。

中高協の役員としても、また同地区の同じ私学としても、明星学園の三十周年を心から御祝する。

りませんか。



ある休みの

日の事ども

上田 八 郎

四月始めの日曜日だったと思うが、六七年前の一卒業生が訪ねて来た。その日は私も少々疲れていたもので、二人で寢転んで雑談にふけつた。本人の結婚問題から始まって、将来の生活設計の話に移り、私もすっかり疲れを忘れて、のんびりと日曜の午前を楽しんだ。ところが、もう帰ると云つて立上りながら、「来たついでに上田先生を少し批判しましょうか」と云つて、につこり哭つた。「先生は学校経営の才はない。また校長という柄でもない。まあ、学級主任なら悪くないと思うね。どうですか。」これにはすっかり吹き出した。吹き出したわけは、図星を指されたと思つたと同時に、多分に自嘲の気持が手傳つていたからであらう。

その後、他の一卒業生がやつて来て、「先生は暇もあまりないでしょうが、味方もあまりないでしょう」とズバリと来た。「大野伴睡氏と有田二郎氏のように親分子分の関係でも少し作つてみたらどうですか」と冷かした。「どうも、もう少し、多量多量の士であつたら面白いがな。大体先生はこれまで嬉しくて仕方がない」と慰められたことがありますが、と追求して来た。考えてみると、私は嬉しくて手の舞い足の踏ひ廻を知らずと云つたような経験はこれまで一度もない。また臍に触つて一晩中眠れなかつたという経験もない。いつも淡々として水の流るる如しである。昔、よく友達から「君は坊主のようだ」とか「君は生れた時から成人だつたらう」となど評されて、あらためて自分を振返つてみたこともあつた。

いつか、湯川秀樹博士の書かれたものを読んだとき、同氏もこれまで喜びにみちあふれた経験がないと書いてあつた。徳田球一氏も何かに自分自身をそんな風に書いていた。かつて日比谷で同氏の演説を聞いたことがあるが、私なんかとは、凡そ違つた男だとその時直観したことであつた。しかし、同氏は形だけは熱血男子のようであり、なかなか多量多量感らしくも見えないが、中味は存外冷静なのかも知れない。ここまで書いて来て、私は編纂子の注文は「思い出話」であつたことに気がついた。「明星の」とは聞か

明星學園三千週年記念 祝歌

きょうこのひに

われらともども

つどいことあや

めでたさよ

みどりのこだちに

かせかあり

われらまなぶ

このがくえん

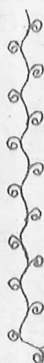
うるわしく

ともがきむすび

とこしえに

ここに

さかさませ



私の感想

会長

高田止戈夫

昭和十八年大東亜戦争に突入した当時の初男部一年に入學した私の子供も、明年はいよいよ高等學校を卒業する段階になつて参りましたが、この十二年間の在學中に奇しくも学園創立三十周年記念式典に際会したことは、戦時中の学園が児童生徒の疎離で動搖があつたり、また一部の極めて認識不足の人々の間ではありましたが、自由主義の学園として白眼視したりした経緯があつたりしただけに、終始学園の教育を絶対に信頼し続けてきた私としては、洵に感慨無量と言ひましようか、過ぎ去つた往時を憶ひ起して万感胸に迫る思いがあります。

終戦後学園に対する再認識が澎湃として抬頭し、遂次今日の盛容を見るに至りましたが、由來私学の経営ほど蕨の道はありませぬ。戦後の後援も無ければ宗教団体の後援も無い私達の明星学園は、全く父兄の良識と熱意とに因つて支持されて来たと言つべきでありましよう。勿論学園の先生方が所謂乏しきを憂えずみた

すらに児童生徒の教養に専念され、文字通り実践躬行の範を示されつつあるその真摯な姿に、私達父兄が全幅の信頼を傾倒したからではあります。要するに学園と父兄とが渾然として一体化したところに学園の生命が脈々として音高く鼓動しているものと思ふのであります。



高田会長

びと言わなければなりません。と同時に私達がこの機会に際会することと思ふことも、楽しい思ふの一つとして忘れることの出来ないものと

であります。併しこうした喜びの中にも、靜かに学園の將來と言ふことを考へると、まだまだ三十周年で満足すべき時代ではありませんまい。学園の理想を達成具現するためには、寧ろ残されてゐるもの今後に俟つべきものが多いいのではないかと思われます。

私達のPTAは一昨年(昭和廿七年度)から再発足して以來、文字通り父世と教師の会として、学園の在り方に就いて全面的に協力して参りましたが、まだまだ発足日尚浅い状態で名実共に完成したPTAと言ふ段階には至つておりません。これは三年連続して選出された会長である私の不敏不徳の致すところが、その大きな原因であるかも知れませんが、学園が三十年の蕨の道を歩んだのに比較して、まだその十分の一にも達しない状態でありますから、これは現在徳試煉の時代として、今些し借すに時日を以てしなればならないかと存じております。併し会員各位の心からの御協力で、一応軌道に乗つて来たことだけは、首肯され得るところではないかと思ひます。

私は冒頭に記しました様に、明春の三月限り思い出多い十二年間の父兄から、一卒業生の父兄と變つて参ります。勿論子供が学園を巣立つたとしても、私の明星学園に対する愛着と尊敬との念に渝るところはありません。数多い懐しい思い出を胸に秘めて、私は学園の発展して往く姿と、暖い眼で見守つて行きたいと思

つております。PTAの仕事も尚一層厳しい思い出となりませんが、私は、私の後に續いて下さる人々に、私以上にこの独自の性格を持つ学園を、より大きく育てて頂く様に、心からお願ひして止みません。それは明星学園は、もつともつと大きくならなければならない学園だからであります。

(昭和二九・五・一六、三十周年記念式典の佳き日に)

愛す、愛された

赤井理事長の式典における挨拶によると、明星学園今日の隆昌を招いた原因は、これも父兄、後援などが学園を愛されたからだと言ふ。これを受けてたつた高田PTA会長は、いやそつでない、学校側がこどもを心から愛した賜ですという。

立場の相違はあるとしても、とにかく美しい、温かい、気持ちのよい議論である。





美 尚

三十周年と私

肥 井 げん

大正十三年二月も終りに近い日曜日のこと、かねて茶畑基氏の御出資による学園創設の計画が成立したので、同志が井の頭の拙宅に集まり、夢畑であつた今のこの地に学園誕生の杭を打てることになった。その時私はありつただけの感激をこめて、真新しい四角な標杭に、墨色も鮮かに「明星学園建設敷地」と拙筆を揮つた事を今でも忘れることは出来ない。その後私は毎晩のようにハトロン紙のような粗末な紙に、児童募集の

光ではあつたが、中に盛られた教育理想は実に豊富で新鮮で発潤たること、何人の追従をも許さないものがあつたと思う。私は言いたい、「かつて学園にいた、又現在働きつつある教師に、今日の明星は築きあげられたならば」と。よい先生方に恵まれた学園はほんとに幸いであつたと唯々感謝の外はない。児童生徒の信頼も父兄の支持も皆そこら生れ深まつて来たの

ポスターを書いた。若き日の先生方は、喜と名のみの集まりにもめげず、そのポスターを新宿以西の各駅やせちらこちら目につきどうとところをさがして張つて歩かれた。出来上つた校舎はポル紙の天井であつたりして凡ては乏しい出

は当然の事と思う。

私は夫婦共働きで三十年という長い年月苦業を共にして来たが、家庭は全く学園の延長で、凡てが学園中心の生活形態であつた。家庭での話題も教育以外には余り持たなかつたし、仕事の多くも明日への教材作りや調べ物などで精一ぱい。時には教育上の大議論も闘わすこともあつてそれがまた私の何よりの向上でもあり研慮でもあつたのだ。世間によく言う共稼ぎの弊もいる／＼あつた事でしようが、ひたすらに「道一すじ」に生きて来た私には、それらのマイナスをおさなうに値するではないかとうめばれている。

会計の仕事なども全く重責であつた。身を挺して学園を守る覚悟以外何ももない。私は私共の同級生の集りの時にはいつも若いと云われる。若し私に少しでも若さがあるとすれば、それはほんとに精神的な若さで、偏に学園生活のおかげ、純真明朗な子供等に接しているおかげである。

三十年という年月は決して短くはなかつた筈だが、私にはほんとにまたたくまのまであつたようにしか思われない。苦しみも悲しみも今は唯なつかしい美しい思い出の絵巻である。そしてその絵巻は、来る日も来る日も希望と期待とを待ちながら、私の生活の場、魂のいこいの場である学園で書き続けられた。巨匠とに仕合せな事であつたとただただ感謝の外はない。

祝典

五月頃して明星は三十周。

武蔵野に大祝典や蝶舞へり。

遊ぶ春の学舎の線浅からず。

山口 晴子
(旧職員)



大変私的な事はかり申述べて申訳ないが、最後に長い間この微力な私を御支援下さつた父兄の方々に深い感謝を捧げると共に、多くの不行届を切におわがしたい。学園はどこまでも子供等の樂園であるよう祈念して筆を措く。

三十周年を
祝して ☆ ☆

○慰靈祭も 祝典も

ただ泣けて泣けて

○よくぞこゝまでと

涙で語る小原国芳師。

○愛しあえた

三三拾年の昇華のあと。

○こののちはひとしお
輝く 明星の星。

○年ふりし 年輪は
白髪に 深きかんばせに。

○真実あいみるところ
泪 あふるる。

○子供らをおまかせ
申します明星学園。

記念式典に参列して

神田五雄

(旧父兄学園理事)

爽やかな初夏の緑につつまれた校庭は美しかった。かつては子供等の遊びの対象であつた若木も、今は見あげるような大木に成長している。創立三十周年の記念式に参列しながら自然の移り変りを感じ、年老いたためか、深い感慨にふけりながらもほのぼのとした明るい気分にあふれたことができた。

創立当時の学園は、見渡す限り武蔵野の森や林に囲まれた大自然の中に、取巻かれたようにボツンと置かれたさやかな校舎にすぎなかつた。その学園が三十年の風雪に堪えて、ここまで成長してきたのである。

学園の成長につれて、あの周辺にも沢山の家が建ち、人海の圧力と騒音とが、静かな環境をも犯しつつある。しかし公園のある限り、王川と水の流れる限り、破壊の限界もそこにはある。依然として明星は恵まれた境地にあり、その生命は持たな

いであらう。

慰靈祭はしめやかに行われた。簡素の中に清冽な空気が流れ、あおいとときにまつわる讃歌というものの見られなかつたことはよかつた。

記念式もこれまで気持のよいものであつた。祝詞というものは、兎角形式に流れ、多くは無味乾燥になりがちのものであるが、語るにその人を得、明星にふさわしい式であつた。

明星の強みは、創立者が三十年後の今日も、依然として健在であり、陣頭に立つておられることである。それであればこそ、創立以来の伝統の精神が、一貫して貫かれておられるのである。

私学には各々建学精神というものがあふ。しかし、創立者が亡くなるにつれて、兎角その精神は茫らぎ、はては消えて行くと行く。明星の持つ伝統のよさは未だ失われていない。またそれだけは失いたくない。創立の時か、げられた教育革新の灯は、いまだに生きていようし、これから教育界にはいよいよ必要とならう。

明星発展の大きな力となつたのは、もちろん創立者であり、援助者であり、これを助けた先生方である。しかし忘れてならないのは母の会である。あれほど子供の教育に愛情を捧げ、学園の存立に熱情を傾けた存在は、他にあつたらうか。

明星にとつて、大きな特色であつた母の会も、今は解消して無い。しかしPTAというより大きな存在に発展して、母の会以来のよい伝統を生かしているのは、嬉しいことである。それにつけても、創立三十周年の記念事業の一つとして、草創当時の母の会を表彰し、または顕彰する方法はないものだろうか。

副会長 古田泰彦

五月十六日、学園創立三十周年記念式典並に物故功労者及戦歿者の慰靈祭に参列する光栄を得ました。此の一遇とも申す可き機会に際しまして、心を尽き、心言ふだけお祈りします。諸賢先生方の遺詞の中に、或は祝詞の中に、今更めて詳に学園三十年の年輪を知り、爾然を正してその伝統の燈火の貴きを仰ぎ、心から現在を祝福すると共に未来の栄光を祈念して止みません。

古語に申します。「創業は易く守成は難し」と。事業は常に創業と守成と交錯しつつ発展しますが、大

く観た場合、学園は今創業の期より漸次守成の代に入りつゝあると考えます。

創業の勇必ずしも守成の能ではありません。又守成の才必ずしも創業の智ではありません。創業の事はその勇渾なるに勉せられて人の和を容易にします。そしてその和は更に創業を推進します。然るに守成の事は兎角静養の態多く、人々小技を競荒して和の乱れ初める事が少くありません。

明星もいよいよ三十才、而立の年であります。創業の情熱を、守成の英智を、総和を、又学園、学校、卒業生、PTA諸賢又大いに和して、茲に和言の妙を光現し、不惑の域に達したいものと念願するものであります。



森崎 昭子

(中一の母)

三十周年記念の式典、祝賀会も滞りなく盛大に終りました。本場に焼しなく存じます。これだけの会を準備し進められた先生方、役員の方々の御苦勞に対しては心から感謝申上げるばかりでございます。

これからさき、又、三十五周年、五十周年、七十年と末長く学園の榮を尋ぐ日の多からんことを心から祈り上げます。

さて本日、会の感想をどの御依頼

でございますが、大要和やかな楽しい会だつたと存じます。それはそれとしてこの度は少々私の平直な感じを書いてみたいと思ひます。

本日は多くの学園功勞者の表彰がありましたが、表彰される方や又は御遺族の方々が下の方から高い處上の理事長より表彰状をお受けになる御様子がいかにもうやうやくといていつも明星の感じとは違ふ感じがしました。赤井理事長はいんぎん可憐にお辭儀をされて表彰状をお渡しになるのですが、何しろ両者の高さがひどく違うので、いくら可憐にされても、下し賜わるといふような感じになつてしまひます。それが何だか對蹠的な感じがして、明星らしくない気がしました。参列者も折角表彰される方々の背中ばかり見えていてお願もよくわかりません。この場合は、表彰される方又は御遺族の方を理事長と同じ壇上にお上げして、お二人が参列者の前に並んで立たれ、外国でしたそこで理事長が手を差し伸べて握手をされるところでしようけれど、それ位のお気持ちで感謝の心をこめて親しく表彰状をお手渡ししたら、形式張るより一層和氣謐々として、参列者一同の感謝の気持ちも共に加わる様になると思ひました。

それから、これから先もまた何回もこうしたお祝の会があると思ひますので考えるのですが、今頃の季節には、ガーデン・パーティが楽しいと思ひます。校庭のところどころにテーブルや椅子を具合よく配置して飾りつけをし、全部の方々が一緒に乾盃をしたら、それから各自めいめい好きなところへいつて、談話の差別なく親しい方と集つたり、旧師へ御機嫌伺いをしたり、来賓の方々の御高説を拝聴させて貰いたり、ふだん御無沙汰申上げていた方へ御挨拶したりします。

こんな会でしたら折角入つたお部屋に誰も知つた方がなくてつまらなかつたとか、親しい方と別れ別れになつたなどという事もなく、日頃御無沙汰している方とも充分旧交が温められますし、又尊敬申上げていた来賓の方の風貌に接するよい機会にもなります。



中 一 冊

(一回卒)

明星学園創立三十周年を心からお祝い申し上げます。今春長女を入学させて頂き、この祝典に父兄の一人として参列致しました事は二重のよろこびでございます。

創立当時の学園は本當に可愛らしく、全校生徒は勿論、父兄のお顔までおぼえてしまふほど毎日どなたかの父兄が来られて、友達の家へでも遊びに行つてゐるようでした。

毎朝吉祥寺駅に山本先生が待つていて下さつて「お早よう／＼」「おはつ」などと言ひながら、細長い所々穴のあつていた木の長櫓をガタ、

ガタと渡り、公園をぬけて行きました。

校門を入ると正面の馬車道の中には草花が咲き競ひ、その真中に置いてある真白くぬつた簞笥のまわりにはもつ／＼つばちがむらがつておりました。

右手の教員室の丸くつた屋根のひざしにはとがー列に並んでいて、その下を通りぬけ裏の井戸／＼鳥の行くと、変な声でなくホロ／＼鳥の小屋があり、その隣りは毛が真白で黒いふんをいっぱいするやぎがいました。茶色で耳の長い犬の「メリ」はどうしてもらう事になつたのか今は思ひ出せませんが、何時の間にか私の家の犬になりました。

校庭はともかく、学校ではその頃から鳥や花を作つたり、校庭いっぱい日本地図を作つたりしました。そんな時井戸端まで鐵を持つて帰える時はとてもくたびれました。

教室の横に「らくやきさま」が出来た時のよろこびは、今から思えば自分で作り出す能力を養つて学校の方針が、創立当時から今に續いてゐる事がわかります。

校外散歩で学校から歩いて行ける所は大に好きでした。見なれた道祖神もいくつもありましたし、小さなお堂の造詣の中をよく見ると、昔の大きなおひな様が白い顔をつかせてきちんと座らせてあるのを気味悪くおぼえて居ります。

こうして今思い出してみると、楽しかつた事はかりですが、その楽し

かつた事はもう二十年近い昔の事になつてしまいました。



小森景子 (中一の母)

「……明星学園のすみやかな発展を祝うと共に、人教のふえることより、その教育の實質、内容が問題であります……」開校一年の頃故沢柳先生が赤井先生あてに送られたお手紙の一通に大要右のような言葉があつたということを伺いながら私の心はひたと今の学園の教育の實際に結ばれました。そして創立当初の奮闘でよき意志にみちた、新鮮な息吹きが今もなお、否一層の新しい強さを加えて通うのを快く感じることに出来、何ともいえない安らかさに見えられました。私学をつくることは或る意味で易しいといえます。しかしそこに三十年の熱意をもちつづけることは、何とむづかしいことでありましょう。日々に加えるものがなかつたら、日々に衰え三十年はあろうか千年でも費い果し、みる影もなく、空しき残がいを残すことではよう。常に新しく、常に行う。私は涙と共にうたいました。「朗々なり常に磨けり……」これはただこどもたちのためのうたではありません。私達親も日々うたつておのれの責からざるを省みて、わが子らと共に進歩していこうというはげましのうた

です。真面目に謙虚に、この世に生れて来たことを喜び、一人の人間が他の人の都合によつてゆがめられることなく、各々の持つすぐれた處をこの古の爲にささげ合つて、いつの日か安らかな眼につけるような社会を子供たちと共に目指していくことを、私は今日、自分自身に誓つたのでした。



高一 間庭の母

緑の木々や花曇りの空をながめ乍ら三十年前といへば、私は女学校の三年生だった、なごりなりの感傷もあつて、祝賀式の空気が何か身にしみるものがあった。

つつましい御



江 藤 朋 子

澤族の後姿を次々拝見していろいろうちは頭上ににびむものを感じてはいたが小原先生の御祝詞の時についに私の類は流れる涙にまかせてしまつた。勿論私の三十年も長い、しかしその月日を宮々として教育につくして来られた先生の友情と、情と信仰のつよさに打たれたのである。

明星創立の事かとおもう、小原先生の機は空に散る（？）……たしかそは、せめてこの三年間に明星のよさを満喫してくれまますよう祈るより仕方がない。

「学園の生徒の皆さん！ 学園はヒューマニティの爲に在ることを忘れず、三十年の歴史の上に立つ明星精神で強い正しい明るいあゆみをつづけて下さい」と希う私の耳にまだ力強く残る明星行進曲の一節「めどめ 若きたましい ひびけ 空と地

んな題名の小説を読んだ事をおもひ出す。若い私は感激してよんだのを覚えてゐるが、その小原先生の切々たるお言葉は大きな贈物であつた。小学校中学校を公立で終えた息子は時々こぼしている。「明星はいい学校だなあ、中学の時入れてもらいたかった」勿論、親の私は息子以上に後悔している。しかし今となつて

の々。」
一心から明星学園に祝福を送る。



堀 (五の一母)

有意義な今日の記念式典に参列させて頂きまして、赤井先生のお話し、又哀ながらの小原先生の御祝詞、照井先生御夫妻始め、三十年二十年十年と倦むことなく、日々明星教育の為御専念下さいました諸先生方の御苦勞、御努力、又御慈愛をひしひしと身に受けました子供達の学校の御祝詞といふだけのものではなく、私達の学校、我が学校と何か自分自身が此の学校の一員である様な気がして嬉しくてうれしくてたまひませんでした。私もその一人でございますが、多くの未だ明星の性格をはつきり知らないうちに親にとりまして、この様にはつきりと感じては無いと信じます。此の明るい学校、熱のある先生方と御一緒に、三十年前の四人の先生方の燃える様な気持ちを今又ここにあらためて受けついで、我々父兄も学校の為、子供達の爲に努力して行きたいと念願致します。まだまだ云いたい感激がございますが、どうもまとまりません。残り惜しい様でございますが一言感想を述べたためました。

各地よりの祝電

◎ニッパツウネン アトハヒヤク

栗原 基
(赤井・上田両先生の恩師)◎ソウリツ三〇シユウネンノゴセイテンラシユクシ コン
ゴノゴハツテンライノル岡崎 栄松 (理・争)
(旧父兄)

◎ゴセイテンラシユクシ コンゴノゴハツテンライノル

山本 徳行 (旧師兄)

◎ソウリツ三〇ネンノゴセイテンラシユクシ コンゴノゴ
ハツテンライノル青木 茂則 (旧師兄)
フミ子

◎ゴセイテンラシユクス

大高 義一 (旧師兄)

◎コノヒライワイ イヤマシサカエライノル

柏井 すすむ (旧師兄)

◎三〇シユウネンノゴセイテンラシユクシ コンゴノゴハツ
テンライノル平林 偕行 (七回卒)
(旧師兄)

◎ハルカニソウリツ三〇ネンノシギテンラシユクス

岡崎 健児 (一回卒)

◎ボコウノ三〇シユウネンラシユクシ アワセテセンボツ

啓行 (四回卒)

ガクユウノゴメイフクライノル

佐藤 重二郎 (四回卒)

◎ケフノヨキヒライワイ アスノサカエライノル

武三郎 (八回卒)

樋浦 太三 (旧父兄)

歴史は尊い

前進のための

「史的要素」

原田 満壽郎

地に驚り、日に映える若葉の武蔵野の新緑——この新緑の若葉こそ、早稲明星の子供たちの生命を表徴するもつともふさわしいものだ。明星二十年の「史」は、若葉の如く常に若々しく、生々溼潤として育つて来たのである。

何故ならば、私たちの学園は、武蔵野の大地に誕生し、達学・創業の第一を、この爽やかな新緑につつまれた五月に、求めているその事実に於て示されているのである。

三十年周年記念——三十年というこの言葉のもつ時間の響きに、学園を愛する意味に於て、私達は無条件に興奮と感激を感じる。そして三十年のうち、二十五年の「史」を築いた一人としての私は、一柱の恩師を怒にすることを許された。

昭和九年の四月、鶴屋の山梨よりこの学園に二十代で赴任した私は、今は四十代——若かりし日、壯なる日のあの日、この日が走馬燈のように駆けめぐる。

二十年の間、無しい日のみの連続であるはずが、同僚や父兄の理想なき激しき鞭の重圧の下に、抗争

も抵抗も學々限界に迫られ、時に絶望を感じ、学園を去ろうと決意したことも二、三回ならずあった。

追憶や回顧をいろいろ心行く迄、自分に対して掘り起すことは、自由でありそして自分だけで陶酔することとも又自由である筈だ。しかし生の人間である悲しさに、親しき者に語り、自分を理解してもらいたいと思ひ、知つて欲しいと願うは人の情でもある。

だが、それが「老人の愚痴」と何ぞ扱ふところなき自己陶酔ならば、これは吾人に対して迷惑なことではない。然し追憶が才二、才三の学園明星の誕生を意圖して、明日の歩みに向つて視野を深め、躍進の構想を指向する一つの「史的要素」となるものならば、敢えてここに記してよいはずだ。

吾輩も躍進も学園の伝統を無視してはいけぬ。「史」を愛さねばならぬ。「史」は尊い、尊いということとは、一度性という事実と、その蓄積にあるのではない。

「学園明星は将来への発展の生命を宿すものなりや。わが学園が国家社会に対して如何なる役割を果たしたりや。」「学園を今日に至らしめたものは何か。」「私達現場の教員は今後何をなすべきか。」「——こうした客観的立場から、明星の「史」を厳密に吟味し、伝統を再認識するその週期的自省と、その意識と必死性

に於て、尸史は轉りのである。

伝統を越えての進歩性も、尸史、伝統の中から多くの明日への暗示があるはずだ。私はこれを研究し、照井小学園長時代の昭和九年から数年前における小学園教育興隆の野望をここに二三披露してみたい。

x x

★明星は特殊学校だ—ということ。
(昭和九年、十三年ごろの噂さ)
わたくし達のよく聞く噂の一つに「明星は特殊学校だ」ということがあった。

特殊学校というのは「身体的知能的に不完全とか、劣弱な子供達を面倒見ている学校」という意味らしい。もう一つの解釈は「早教育とか天才教育の興隆場」のような内容を持つ言葉として用いられたらしい。これはどちらでも当たらない。

明星の小学園は普通の小学校である。数多くの志願者の中から知能テストをして優秀児だけを選抜せず(現在は選抜しているが)また、ことさら劣等児愛育児をも蔑めはしなかつた。

凡そ年令相応の健康と知能をもつた児童で、団体生活に可能である限り、そして明星の教育に理解して下さる父母の子弟である限り、教育に養育を傾けてきたのであった。

従つてそうした子供の天分を完成してやろうとする「そのための特殊な骨折と研究を惜しまない学校である」と言つ意味なら、敢て特殊学校と云われるのは正しい。現在もこ

うした意味でお使い下さるなら間違いない。

x x

★社会科への序曲
(昭和十一年)
自然科として、後に生活科として

武蔵野

高松芳江

豊かなるこの武蔵野の地を選び明星学園を創立せしむ

学び舎も清らに飾り皆共に今日の創立記念日を祝ぐ

永遠に栄えませと高らかに歌へば胸にこみあぐるもの

木々の葉のそよぎも絶えし板庭に今し高らかに祝歌は響く

熱き涙拭きつつ今日を喜びまたふらふらと歩むる師の御言葉憶し
(小原先生)

二十年前の昭和十一年には、今日の社会科を完成したものだ。

当時、構想した生活科の指導目標は次のようだった。現代社会を離れては子供の生活はないし、又子供の生活のないところに小学校の教育の意

味はない。子供の教育は子供の社会生活以外からは出発出来ないことは明かである。

昭和の教育のスタートは、明治教育大正教育の破壊と限界を清算し、立身出世主義、器械への鋼型主義が

x x

★自由主義の学校だから

自由主義の学校だから、子供がたらしけないとの批評を当時、時折聞いたものだ。

放恣とも見え、混乱とも考えられるものの中に、規律を求め、自律的に生活のルールを組立ててとして確立するという方向に於て、倫理生活を強調している明星の教科課程には、修身科なるものはなかつた。そのために、いろいろ査問から曲解され、誤解されたものだ。

自由主義は、あくまで教育と天切だ。然し如何なる場合にも、指導なし補導が加わらねば何物をも、もたらされぬ。自由勝手にやらせるといふ教育の仕方は、子供に良識と健康を与えるものではない。

「自由と規律」の問題は、私共にとつてはすでに検討済みのものであり、市民的自由のための規律と規律訓練は十年前、二十年前すでに学園に培われ、民主主義的伝統として存在したはずだ。

x x

★のんびりした生活

———といふことについて、近頃またよく聞く言葉だ。のんびりした性格、といふことを、何等鍛錬を含まない教育の意味にとられていふようだが、この言葉位、自他

共に毒したものは無いと思ふ。
「のんびり育てる」ということの
本当の意味は——自覚的で自律的で
あるならば、必ずや億病も怯懦も吹
きこび、消極的なものも克服され、
創造的な、そして明朗な生活が生れ
育てられるのである。

それには、天分や素質を検討し、
所謂個性を尊重し、それに即した指
導をすること、力一杯いつも自分
の力を働けて努力する生活を、構築
させる。その当然の結果としては明
朗で、過剰な子供が育つのである。
明朗な子供こそ、逆境にいて常に
口笛吹いて真直に前進出来るのであ
る。

●部落会

(昭和十年)
同じ学園に子供を托している、
こつした共同意識を中心としての会
合を、或る近隣地域を単位としたも
のを部落会と称した。

例えば阿佐ヶ谷南部の父兄とか、
永穂町附近の父兄とか、と言つたグ
ループで、近隣の父兄が、その場所
の適宜の家を中心集り、学園から
は照井先生の外二、三名の教師が加
わつた。

近隣でもあり、夜中でもあれば両
親揃つて出られることも可能なわけ
だ。子供達だけは、よく行つたり末
たりするが、親達はお互に顔も家も
知らぬというようなことで、本當
の教育は樹立出来ぬ。
同じ学園に子供を托している親達

と、教師とが吾が子、吾が教へ子
親りの子、満りの教室の子供を契
機として、暇びと慰めと、励ましと
理解——さうした意味で、十年の十
月に誕生し、和やかな部落会が毎月
一、二回実施されていたのであつた。

★児童の体育——体位測定——
(昭和十四年——十八年)

之得るよう科学的に研究し、実践の
経験を経て居ていなければならぬ。
それは体育にのみ限つたことではない
いが、体育は生命の問題に直接連関
もつ以上、子供の現状に対する診断
に、その方法に、徹底さがなくては
ならぬ。

昭和十四年十月に始めたものは、
総合的な子供の体位(広い意味の健



温入祐里子 (3の2)

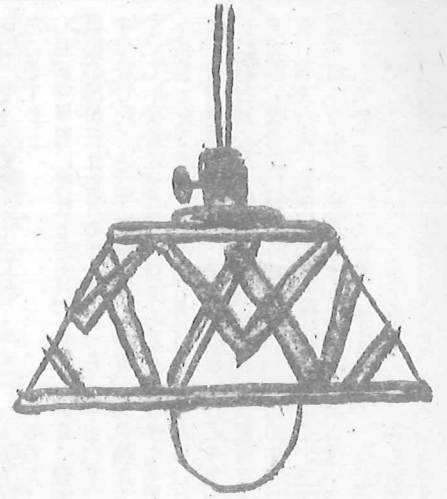
都会の子供を丈夫にするには、ど
んな運動をさせればよいか、具体的
には明星の子供にはどんな運動が妥
当かと、この問に対して具体的に運
動項目を示す事が必要である。
指導する以上、そしてそれが教育
である限り、こつした間に明確に答

屋度)の測定であつた。この試みは
主に運動の量的方面を規制して行く
ものであつて、この体位度(健康度)
判定の方法は、前にも述べたように
主観的のものでなく、極めて客観的
で普遍性のある方法を用いたのであ
つた。

(この測定の結果は学校及家庭共に
重要な資料とされた。例えば——日
常の学校生活に於ても、自由時間の
運動や学課に於ける要求度等も、健
・普・弱)の判定によつて、幾分の
手配を加へるは勿論、遠足・登山・
水泳・競技等学級全体又は全校同時
に行われる色々な行事についても、
必要に応じては、学年に重きを置か
ず、体に重負をおいた編成をなし、
各体位に於じたコースをもとらせる
こともあるわけである。

× × ×

なお地内教育とか、校外学習及び
関西旅行・箱根清水旅行・水戸日立
旅行等の実践の足跡や、三浦の三戸
伊豆の伊東の湯涌生活、及び初期の
瀬戸寮の生活、浅間山麓のト野原寮
の林間生活、一・二三年の学校の夏
季生活などのプラン及び型範とか、
科学教育に対する構想と系統案、大
山と京波山、箱根・三原山・浅間山
・富士山の火山学習をきむ登山、高
尾と御岳の春秋定期の登山とか、浅
川と学園岡、羽田・調布・多戸川と
学園間の夜行軍、学園・大月・甲府
間の集団徒歩の実践やプラン、等々、
私も参画し又実践したことについて
いろいろ書くことはあるが、後日機
会があれば書きたいと思う。



明星の追想

金子 治郎

(旧 職員)

明星学園の歴史の上で、赤井先生
の欧州視察旅行は記念すべき事件で
あったと思います。そのころの詳し
いことは思い出せませんが、先生の
外遊にまで盛り上つて行つた生々
とした学園の空気が、なんとなく花
やいだ気分は、今でも鮮しく追想され
ます。ミッテェルの「風と共」に去り
ぬがアメリカ力のベストセラーだ
と言つて持つて帰られたのがその時
です。

それが多分昭和十一年だつたと思
いますが、考えて見ると、同じ年の
二月が例の二・二六事件であつたわ
けです。朝、学校へ行つてから、初め
て青年将校の暴動を知つたのですが、
何でも教室にストーブのあるところで、
一時間目を生徒と一緒に興奮してし
やべり合つたことを覚えてあります。
日本の歩みも、あの年を境にぐつと

石を回したわけですね。

私は昭和八年四月に赴任して、十
四年三月まで、専ら文学部に厄介に
なりました。ちょうど、昭和十一年
を中心にして、前後八年に亘るわけ
です。個人的に申しますと二十七歳
から三十二歳までで、人生の中道だ
つたわけですね。明星のお蔭で、私は
細々ながら自分の道を踏み出すこと
ができました。

学園のこと、社会のこと、自分自
身のこと、よくと角張つて考え
てみれば右のようになりませんが、今
私の追想に浮んでくる明星の生活は、
とても愉快楽しいものばかりです。
文学部の教員室をスケッチしてみ
ましよう。いつも夢を持っていた赤
井先生、歩き方にチャップリンの風
格を持つた吉田先生、「大根」を嫌
悪した佐々木先生、生節に砂塵を入

れてかきまぜ、それをパンにつけて
召し上つていた青木先生、生徒の微
細なこころの隅の方にかざして見ていら
つしやつた渋谷先生、いつも嬉しそ
うな趣智先生といつた具合ですが、
縦じてみんな「童心」のようなものを
持つていて、生徒といつしよに遊
ぶことは嫌いでなかつたと思います。
時々中学部の方へ行つてみると、
そこには、頭のとつぺんから声を出
すような論客が揃つていました。中
でも、上田先生、内野先生、杉山先
生の三編対は、虎溪の三笑を思わせ
る独特な笑いと毒舌で、大概の者は
吹き飛ばされてしまいました。上田
先生と「文芸春秋」、内野先生と「
星雲時代」、杉山先生と瀬河の井
いづれも印象深いものがあります。

小学部の照井先生御夫妻は、お二
人とも眼に特色があり、ちよつとせ
きこむようなお話ぶりに、何とも云
えない魅力がありました。

先生方のことばかり書いて生徒の
ことを書かないのは、明星の場合殊
に片手落ちのように思いますが、私
としては、先生方のことを思い出す
といつしよに、あの時この時の生徒
のことにも思い及んで、結構愉快だ
つた明星生活を反芻しているわけ
です。が、ここで私の印象をまとめて
あのころの文学部生徒の気風を分析
してみますと、

- 洒落気・・・20%
- 茶目気・・・20%
- 純真味・・・40%
- 野暮味・・・20%

となりません。評価はもちろん甘すぎ
ますが、それは思ひ出ともなれば致
し方のないところでありましょう。
それでも異議のある方は筆をお願
いします。

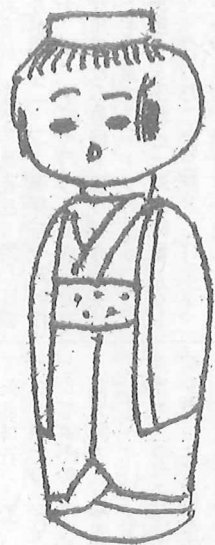
潮干狩

海の幸今日一日は吾子らにも
恵み給えと掘りに掘るかな

潮吹と知らずに取り回す親子等に
貝売り婆々の近づきにけり
すばらしき衣袴をまとひし貝殻を
潮に洗ひてしばし見ゆるる

我も又子供に帰る貝拾ひ
あつた／＼と声高うして

石田 みさ子
(小二の母)



江 藤 朋 子 (3歳2)

憶いの子のまもり

多 湖 実 輝

開校三十周年の式典を挙げるほど成長して、今や益々盛大に発展しつつある我が校を心からお祝します。この三十年の歴史の中の二十六年ほどは、私もこの歩みと共に進んで来たのですから。

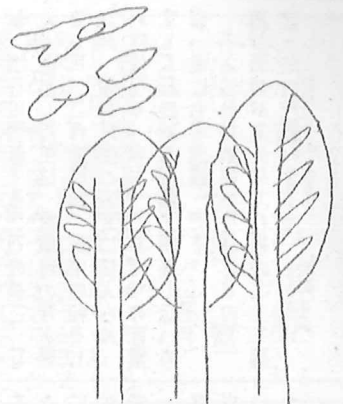
私が中等部に就任したのは、その開設の昭和三年四月の十日であった。中学校に行く、丁度平出君が怪我をして小使室に来たのを新来の私が手当をしたことをまた記憶している。学校の風景は私の受けた博物の教授には都合がよかった。その時分には井の頭公園の池には七井橋などという長い橋もなく、周囲は松の林で、無論家屋もない。千代田光宇のある所は大きな扇であつた。水清く緑は濃く、そして田圃にはレンゲの紅とタビラコの花とが広々と続いていた。

文学校は二つの教室で、一つは教員室で後に柏木といわれた女の先生がおられた。中学校の方は今の教員室のある校舎だけで、四五人の先生がおられた。生徒は文学校も中学校も十数人位であつた。植物や昆虫にはなかなか珍しいものが沢山あつた。生徒と野や山に親しく虫を捕え、花を語りあつて授業をした。茶目な生徒はレンゲの花に他の草の葉を添えて、先生この植物は何というのですと質問する。何かと迷つていると、わからん草、でしようなどとやられたものだ。秋になると茸類が沢山とれた。動物では鳥や昆虫の外に蛇が沢山出た。始め生徒が蛇を怖るもので、蛇の捕え方を教え、毒蛇でないものは少しも恐ろしくないと教えた。するとついに女の先生が机の抽出を開けてキヤツという事件を生じ、蛇捕は厳禁された。二十五年前の明星附近の生物はそれから大変な変り方をした。井の頭の池には大きな雑鯉が沢山泳いでいたし、イトヨ（ハリウオ）などもいた。鯉は心なき人の為めに釣られてしまった。水中植物はセキシウモ、ホザキノフサモ、ヒツ

ジグサ、オホヒルムシロなどが繁殖していた。自然文化園の水族館から捨てた外国産の鯉に圧倒されて今はほとんどなく、これに代つてオホカナダモ、オホキンギョモなどが池いっぱいになつてしまつた。七井橋の吉祥寺よりの所にはシナグワイというのが群落をなしてはびこり出した。森の中の植物でなくなつたものは至つて多い。ギンリョウソウ、シヤクジョウソウ、オニヤカラ、アオテシマなど。明星の校舎も年々建加えられた。私が始めて見た小さな学校は今も堂々と発展した。私は二十六年間を振り返つて見て種々思い出があるが、まず第一に私は明星に感謝しなければならぬことがある。それはいろいろの教授法の勉強をさせて頂いたことである。昔凡の五段教授法からダルトン・フラン・テューイ式の教授法といういろいろ的研究的をやつてみた。しかし私の生物や地学の実はどれほど結んだであらうか。生物の先生になつた生徒は二人ある。が嬉しいかつたのは、横川武先生の御母様に「先生がよい事を教えて下さつたので、武は植物の道楽の外ありません」と感謝されたことであつた。

明星の教育は自由主義である。生徒のもつ天分を生かして行く教育である。私達の教員室や教室の空気は実にいい。他の学校では見るこのでできないもので、長々とこの学校を臨められなかつたのは、校長先生方の入招と目識とによることは申すまでもないが、一にこの空気のよさによるものと考える。生徒や父兄方の或る人は明星の教育を兎や角といわれるかも知れないが、私は三十年間ほど一高に勤めていたが、所謂東京の優良校の卒業生が入学後一二年で全く心身を消耗して、廃人の如くになつて落伍していつたのを幾人も知つてゐる。明星の生徒の中にラジオに凝つて、数学や英語など何もできなかつた生徒があつた。他の学校にたつたら追出されてしまつたらう。しかし卒業後自分の望む学科に入るや、俄然頭角をあらわして、数学も語学もどしどし征服して、今は立派な科学者として数多くの特許を得ている。他の卒業生でも上級学校でへこたれる者はない。これは徒に脳力を消耗せず、自由に精つてゐる天分を延ばせる力を養つてゐるからである。統計はとつてみないが、学者になつた人、実業家、音楽家などになつて、古の中に活躍してゐるものが多々ある。長い目で見れば、明星の教育も悪くはなかつたのだと考えてゐる。

〔多湖先生は長く一高に勤務されたと共に、明星で生物、地学を教えられた。ガマの油の権威で、明星附近のガマがいなくなつたのは先生の研究の論である。現在御病氣のため休養されてゐる。〕



明星のせつ子

明星と私

船山博彦

記憶はや、忘れかけましたが、明星は大正十三年五月創立ですから、その年は私は数え年十二才、小学校の五年生でした。私の学んだ小学校には明星を創られる前の赤井先生や照井先生御夫妻が居られた関係で、或る日の遠足に主任の先生に連れられて明星を訪ねたことがありました。その日の記憶をたどってみると、途中の様子には全然憶えてはいませんが、明星に到着して芝生の丘の上に松の木が並んでいたような風景が浮んできます。その木影には、照井先生をはじめ、少年の日の横川先生を兄弟や、休庵中の富永三郎先生達も確かにおられたのだと思います。芝生に坐つて私達をかこんで迎えて下さったその日の御馳走が、ふかしたてのじやがいも。照井先生お手廻えのどのうまかつた味がいまもつて忘れられず、それ以来大好物の一つとなりました。又その味が私をして、

後年明星に奉仕させるくさびとなつてしまつたらしい。余談になりますが、今、私の住んでいる所は、寒川先生命名による「じやがいも通り」。よほどじやがいもに引かれる縁が深いと思われまふ。

記憶は猶んで昭和十四年、当時私は地方の一都市の吏員として、予算に追われる仕事に矛盾を感じて、転身を考へていた時に、赤井先生からの召集令を載いて馳せ参じたのがこの明星。以来十五年、その間、赤井と田西先生の御配慮に頼つて、たいしたしつぽも出さずに、いつのまにか教務主任にのし上り、橘、善方面先生の後塵を拝して、毎日諸先生に御迷惑をかけている次第。明星創立三十周年に當つて、厳正に卅二才。世帯男の厄年とか。如何なる大厄か身に及ばん。

土足であがる女学校

山岡幸子

ついこの間出た様な、又長い長い間ここに居る様な、実に感慨無量です。土足で上る女学校、教壇のない教室、親しみやすい生徒達に驚いたものですがそれも遠い昔のこと。

子供達はすくすく仲間で行くのに、十一年間、これという争も出来なかつた事を、今更ながら恥ずかしく思っています。

在學時代の思い出

横川尚

早いものでもう創立三十周年を記念するところ。Good old days、は昔はよかつたな、と誤すのだと、うですが、たしか昭和三年秋小学校へ転校以来、中学校の五ヶ年、昭和十九年より教員として奉還すること十年。合計十五ヶ年半は学園で遊び、悪童ぶりを発揮し、而して今では卑ら悪童達に悩まされ続けて来ているわけになります。

小学校では照井組に編入され、文字通り照井先生の手塩にかけられたわけなのですが、何分半ヶ年位の短期間ではあり、特に強い印象として残っているものは、ごくわずかです。

その一は、先生の授業態度が非常に厳格であつたことです。よくナヨークが飛んだものです。そしてよく命中したものです。数学と地理の隅隅に特に激しかつたようです。歴史は得意中の得意。生徒が謹聴して、いようがいまいがお構ひなく、滔々として并ぜられたと記憶しています。

その二は、先生にはかなり説があつたようです。(今でもあるようです)先生が秋田の出身といふことばずつと後で承知しました。

その三は、図画の時間校庭で写生をしていて、後に立たれて驚く驚くつて見ていたようですが、我慢ならずと思われたのか、「君、君、そんなに藤柳の竹の棒を一本ずつ書いていたんじやダメだ」。先生の口吻には前の学校の図画の教師は何を教へていたんだ、という位の怒りがこもつていたようで、小生思はず赤面しました。今でも図画は大の苦手です。

その四は、何かの行事で演劇上演の際、家老の役を振り当てられ、元気があつてよいとのおほめの言葉を頂き、調子にのつて、下男に呼びかける「おお、これこれ、何をしています。早く掃除をしなさいか。お掃除のお出ましだ」となる台詞をどなり散らし、満堂をびつくり仰天させたことです。それ以来どつとも小生には

威張るくせがついたようです。因に殿様は有坂毅一郎君、下男は花島三郎君が演じ、西君とも今は七き人です。

その五は、水道道路線建設です。もちろん現在地表上のアスファルト道路ではなく、その下通かに埋設されているコンクリート製水道管です。当時工事は未完成で、公園路切り南側、今の交番のある附近には大きな口がポツカリ開いていて、好奇心の湧りみだいな少年の心を、いやが上にもそそつたものです。某日放課後ランドセルを背に、ビケ帽を頭に頂き、手に手に蠟燭をたきさえた面々、正に騎虎の勢、入口めがけて突進しました。初めは元気のよかつた者共、双才に流転を守り、イタズラ者が蠟燭を吹消すに及んで泣出す者も出る始末。今、水が流れて来たらどうなるか、等の真面目な疑問も頭に浮び、やつと前方に明るい一光が見えられた時の嬉しさ。思わず馳出しました。出口に到着するまでの長さ。ななと這出した所は、武蔵境の浄水場でした。この冒険談、秘中の秘でしたが、照井先生のお耳には入らぬわけはなく、今もつてお叱りの言葉ましておほめの言葉を頂戴しないのは「在にも不思議」です。

予えられた紙数も尽きますので、再び機会があればその後のことも書記したいと思ひます。

ツバキと椿

松田 茂

(十五回分)

PTAから記念号に寄稿する様にとのこと、実は驚きました。勿論ベアレントでもなく、況やティチャアでもないのに、PTAとはMSA同様縁がないと思つていたので、これに急に矢張りMSAと同じ様に關係があるものかなと泌々感じました。学園とお別れして七年、然し人生五十年として半生を生きて来た以上その又半分お世話になつた学園の思い出は矢張り楽しいものが少くありません。その一つ。

照井先生には六年間お世話になつたのですが、先生壮年時代のお元氣な頃——といつても今老いばれたとは毛頭思いませんが——で、正に先生はツバキと言葉とが同じに飛び出す位でした。

或る日、国語の本の上に、頭を小突きに弄られた先生のツバキが一つポツンと落ちて来ました。叱られてゐることも忘れて紙にちんで行くそのツバキを見て居りましたが、漸く先生の去られた後、本の上のツバキのしみを鉛筆で描んで、先生のツバキとかいておきました。次の国語

の時間、楽しみにその本を開いた時既に紙の上のシミは乾き果て、唯鉛筆の丸い印文だけが残つて居りました。

紙ににぎんだ水分でこそ濃くもなり、池の様に圃にも出来たツバキの跡も無く消えた後は、丸で果敢ないものでした。

然し、夫れも先生の熱心と誠実とのなせること、今もつて思い出されるのはその熱心である事もよい証しでありましょう。

六ヶ年の先生の御指導が現在の私達の基礎である事をよく覚えて居て過日、秋々十五回生が小学校卒業十週年を記念して、先生のお好きな「椿」を送つたのも由な事ではありません。

国語の本の上のツバキの跡は消え去つても、先生の私達への教訓の数々は今もつて消えてはいないこと、そして母校の発展と共に益々先生のお宅の庭に椿の増えることを祈つて拙稿を終わりにさせて頂きます。

(在神戸・五月十二日)



心崩おれて
あれは

まさ子

感傷と知りつゝ、恋し名を呼びつ
おさな心のふるさとの友

物は云わず手取合いて見交はせば
それにて足ら得しその友恋し

武蔵野の消滅せる夕陽に
声なく吸われてひたぶるに行く

はたと陽は山に落ちてふりかえれば
あつと息の正見も知らぬ路

閑の林態智識ちらし急ぐ帰路
友の手熱くたたくにすがる

思出の一コマ一コマに生きてあり
傷つきて今故郷は恋し

故郷はありて哀し崩おれに
心の支え感傷に落つ

お化けの世界

坂田 寛

(二回卒)

昔の明星の子供達はよくいたずらをしたり、授業をさぼったりしたものでした。先ず第一に蛇をつかまえること。第二はそのつかまえたへびを先生の机の上にはりつけておくこと。これは新任の先生がおいでになつたとさば必ず「さもだめし」と称して行われたものです。昔の先生方でへびの嫌いな先生は、杉山先生、故内野先生などでした。

次にお化け屋敷探検と称して、学校附近の空家に入りこんでガラスを破いたり、櫓の下をはいすり過つたりしたものでした。この時の同級生坪田正男君の日記帳が『ネタ』になつて、坪田譲治氏の『お化けの音界』が出来上り、氏の名声を上げる原因になつたらしいのです。授業時間中に教室の床の下にもぐりこんで、先生の講義をいらつしやる下のあたりで野球のバットでコッソ／＼やつたり、奇声を発したりして先生をビックリさせた事などは、朝めし前のことでした。

多淵先生は『おこる』と生徒の首ツ子をつかまえて教室の隅におしつけ、故内野先生は生徒の耳をみつばつておこりました。赤井先生はおこ

ると鼻の先が赤くなり、上田先生の唇のすぐ下のあたりがピンク／＼動いて居る時は、先生が非常に立腹している証拠でありました。

思い出に
よせて

霜田 光一

(六回卒)

明星学園で少年時代の十一年間という長い年月を過ごした私には学園生活の思い出はつきない。卓ボウボウになつた運動場でバットやコーロギを棄えたこと、近くの森にリスを見つけて追かけたこと、茶色の野兎をみかけたことなど今の校庭や附近の住宅をみると、全く昔話になつてしまつたことを感ずる。こんなことをいくら書いてもきりのないことだから、最近感じたことを一つのべやうと思う。

よく学校を出てから何年、何十年の後になつても時折、学期試験などが出来ないうで困まる夢をみるといつ話さなく、一番一番の席次を争う様な成績で、一中、一高、東大を卒業した様な典型的な所謂秀才ではどうだろつか。私は、そういう秀才は試験に堪む夢など見ないかと想像していたが、彼等の大部分がやはり試験の夢を卒業後十年以上にもなつて見るといふことを聞いて少々驚いた。明星の卒業生は数多い中には試験に悩む夢を見る者もあろうが、殆んど

大部分の者はそんな夢を見ないだろうと思う。明星生活の夢を見ることがあれば、きつと楽しい思い出の一場面の夢にちがいない。

明星がいつまでも、若い人達のために希望と悦びをもたらし、未知の吾界へ進む勇氣と力とをばぐむ学園であることを望みつつ筆をおく。
(東京大学理学部物理学教室)

日のめを言えな
いでいた言葉

榎本 ナナ子

(七回卒)

井の頭公園をぬけてかよつた、もとの明星学園高等女学校の五年間は私の学生生活を通じて、一番楽しい時代でした。

戦前の当時としては、数少ない自由主義の学校として、そのころ園長をしておられた創立者の赤井米吉先生をはじめ諸先生の理解あるもとで、私達はむりに制服を着せられることなく、人格や個性を無視し、聖にはめられることもなく、のびのびと育てはぐまれました。

生徒のほとんどは、中流以上の家庭の人たちでしたが、なかには、私たちのように、貧しい芸術家の家庭の人もありました。私などは、二、三十円の費用の遠足にも、時にはケ病を使つて休んだこともありました。ですから、そのころ三十円の月謝を特別の考慮をはらつていただいたい

たにもかかわらず、いつもどこおりがちでした。この月謝のことでは、実に感激し、一生忘れることのできない思い出があります。

学校は、いつも経済的にはらくではなかつたようですが、私は卒業もま近くなつたのに、ほぼ一年間もたまつた月謝を、どうして私に私にせせていたのだ、女子大の入学の手続さもしていただきたまはたので、むりをして滞納の半額ばかりを母が納めにいきました。そして残りをお詫言ひし、会計の青木ふみ先生にお詫言ひすると、青木先生はニコリして受取られ、母があとから見ますと、お払いしていない分にも全部私にすみの印をおしてありました。それで青木先生に、おまちがいでしたとあたすねしますと、「いいえ、これでよろしいんです」といわれ、赤井先生にお会いしてこのことをお話ししますと、先生も、

「いえ、それは、それでよろしいんです。もうそんなことを心配なさらないでください。やりたいことをやりぬいて、社会に有用な人になつてもらえは、それでいいんですよ。」

と、こともなげに云われました。帰つてきた母は、こう話しましたので、父も姉たちも、赤井先生及び学校に感激し、ここに明星学園の高い教育精神のあることを身にしみて感じました。そこであつて金策して、ほどなく残りの月謝全部をお私

いしたのでした。

あれから、もう十五年、私たちは折にふれ、なんどこのことを話しあつて、先生方や学校に対し感謝したことでしょう。けれど父はずつと病気がちで、いまだに御恩返しのできないことを申訳なくいつています。私も父と同じく児童文学に情を注ぎ、最近第一作品集が出版される運びとなりました。ばかりで、先生にも学校にも、まだ、なに一つお願ひできずにいますことを、大へん申訳なく思っています。『一九五四・五・一八』童話作家

思ひつゝ

福沢 慧

(明星会幹事長)

三年たてば三つになるといふ言葉があります。明星も何時の間にか三十年たちました。三十になつたわけです。何時の間にかといふのは、何もぼんやり日を過したといふ事ではなく、一日一日の苦辛経営、努力が積み重つて月となり、年となり、三十年となつたわけです。赤井先生の真摯な筆も、だんだん驚異の月になり、その筆も大分疎らになつて来たわけです。先生が明星を創めた時は三十八との事、先日先生からお伺ひして現在の私と三年の差しかないのに驚きました。

井の頭公園も、その南側の森も、この間にすっかり展けて昔の面影を失いつつありますが、私らは通学していた頃の公園は亭々たる杉がそびえ、今ののんき旅館の辺りから板橋の所まで、あの細い街道と森の小路の他はズーッと松林と草むらでした。

毎朝入学式の後のお茶の会は裏の森で全教生徒輪になつてやつたもので、中学に入つた年でしたが、平山博物



あちこち散歩です。絵の対象を撮すのではなく、何か面白いものを見つけて歩くのです。そのころはそれこそ公園内なら隅から隅まで知りつくして、振をからかつたり、家鴨を脅かしたり、

魚を釣つて園丁に追いかけられ、これでは二時

館ができて、昆虫や蝶を採集する道具等を買ったり買つたり、外国の珍らしい蝶を眺めたり、大抵毎日寄つては二時間位遊んでいました。そのくせ、夏休みの宿題の標本は二学期も明日出すという日になつて、大慌てで網を振廻したものでした。三年位の時には、二時間位は美術の時間に何処に行つてもいいのですが、我々仲間五六人ずつ集つて公園を

でも足りつてありません。そのうち十分位になつて時計を見た奴が、おれも十分しかないよといふと、それから扇用紙を紙けて鉛筆用と称するものを描きはじめます。水彩画は面倒とパレットなどは始めから持たず、ゆきません。当時の先生は右派先生で、その日は他の学校にもいらつしやるので、十二時少し過ぎると帰

られる。それに入道い位に帰るわけ。偶々先生が少し遅く学校を出られて門の辺りで逢うと、「なかなか描けなくて遅くなりました。未通出します」といふと、先生も「今度見せよう」と帰られます。一度私の例の鉛筆画も教員室の壁にはられました。自分ではなかなかいい絵だと思つて先生にも自慢しましたが、口の悪いのはあれは下手な方の標本に違いないと確言しました。但し雨の日は寂れでした。部屋で学生がなにかやらされると、借りて来た猫のようなものです。物理、化学は富山先生でしたが、その方は凡そわからぬ私もあの頃の実験は懐しく思っています。マクテスルグ半球といつ中が真空の球を、何十頭の馬が左右に牽き合つても割れないという例の絵があり、先生がみづつとてみる、絶対に開かないからといふので、誰かがウンとみいたら、パツと割れたのです。爆笑。先生は怒つて、お前らは囃いでしようがない。だから実験はやれない。と云われ、スリスリします。今度は大人らしくしますからお願いしますと、皆で交代に譲ると、だんだん怒気が去り、終に「やうとして大人しくするならもう一度やつてやろうか」と始めるのです。皆の失敗を期待する顔、先生の厳かな顔、あの特徴ある話しぶり、今でもマザ

マザと思ひ出されます。因漢は内野先生、戦時中お亡くなりになりました。我々遅刻しそうな組は、(いつも遅刻しそうでなかなか五年間出席には一回も遅刻はありませんでした)先生の長い脚にくっついて御殿山から上水のふちを駆出したものです。冬でも学校へつくと湯気の出る程暖かくなります。冬の暖かい日は教室の枯草の辺りに椅子を持出して授業があります。これは甚だ眠気を誘うもので、気分のよいものです。先生は寝たり、居眠りあるのがいると、もうやうんと怒りましたが、此方も四、五年になると應々エを初かして、煉縄工の尾端なものを買つて来て、先生の授業の前に机の脚下におき、ちり紙をмонでそれにかき、先生が、「皆始まるぞ」と手を挙げてくると、一人が「先生、大が教室でクソをしました」というと、先生は始めての事でサスが悪戯とは思ひもつかなくった極で、「什様がない。

戸外でやろう。」と美事に手に乗ったわけですが、本当にひつかかったのか、或は謀略に敵意(?)を表現してだまされたふりをしたのか、後でおささしよつと思つていました。遂に果さぬいうちにお亡くなりになつてしまいました。杉山先生の名調子その頃公民という名の学科も楽しい一つでした。平易な言葉でいて痛烈な諷刺、軽妙な警句など我々を一時聞文字通りひきつけました。時間の足りないのを嘆ずるほどでした。先生ももう二十余年勤続され、例の名調子を今でも拝聴出来る事は明星にとつて幸甚な事です。

大分筆のおしやりをつくしました。最後に、中学の生活、否その右今日迄を通じ最も深く我々と関係ある上田先生の思い出を述べて、筆をおく事にします。英語の先生、大先生です。中学部長でした。私は英語が性に合ったのか、一年の時から好きで得意でした。そうそう思い出

しました。時間が来ても授業をやつてゐるのを、我々は「超過」と云つて敬に戒める処で、「二分すぎる」と誰からともなく「超過/超過/」と囁き出し、講義の終了を求めます。ところが上田先生の時間はさすがにおつかなく、悪魔達もシユンとして一生懸命です。一度講義の都合で確かに十八分位超過しました。この時ばかりはあの囁き「超過/」という言葉は糊上げされていきました。冬はストーブの上で弁当をのせて暖めるのです。ストーブですから、少し熱すぎると弁当が焦げて来てうたつてきます。一度下においた奴は慌てて降すのですが、某日ヨースが上田先生の時間、例の如くくさくなつたので降しにかかつたところ、美事一喝をうけました。それ以来毎時間目の上田先生の時間は、弁当の一番下になり手がなく、終に暖めなくなり

中沢

学び舎の章つけたる祝典の
赤き菓子食み 吾子と慶ぶ (三十周年式典の日に)

落ちて尚 命ある如、くれないの
色も深之たる 稲の花は

病む床にめでて愛しも
淡紅と青と映りし 矢車の花

になりました。時間が来ても授業をやつてゐるのを、我々は「超過」と云つて敬に戒める処で、「二分すぎる」と誰からともなく「超過/超過/」と囁き出し、講義の終了を求めます。ところが上田先生の時間はさすがにおつかなく、悪魔達もシユンとして一生懸命です。一度講義の都合で確かに十八分位超過しました。この時ばかりはあの囁き「超過/」という言葉は糊上げされていきました。冬はストーブの上で弁当をのせて暖めるのです。ストーブですから、少し熱すぎると弁当が焦げて来てうたつてきます。一度下においた奴は慌てて降すのですが、某日ヨースが上田先生の時間、例の如くくさくなつたので降しにかかつたところ、美事一喝をうけました。それ以来毎時間目の上田先生の時間は、弁当の一番下になり手がなく、終に暖めなくなり

ましたが、どうして、どうして。上級生がバケツやホウキをもつて応援にきてくれて、やつと鎮火。後が付けません。皆同罪なのですが、マツチをもつてた奴、つけた奴、大丈天と消火をおくらせた奴はとくに重罪。つけたのが私です。あの時は上田先生にコッテ小目玉のとみ出るほど叱られました。マツチも同然でした。しかるに大丈天だよの男は先生も気がつかなくつたのか、叱られた形跡がないので、太いにムクシタ大丈天は、四五日絶交して口をきかなかつたことを覚えています。

※ ※ ※

みな学園の
おかげです

白地米蔵

今回三十周年記念式場に表彰を頂き誠に光栄と存じます。私の子供は五人の内四人は明星にた人生を致しました。早や長男十八になり、工員で働く様になり、一家幸福で暮らします。皆明星学園の御蔭で有ります事を厚く御礼申し上げます。

その日の思い

ある母より

親戚の結婚式の為三十周年式典に出席出来ず、これ迄四人の子供のお世話になつた学園に誠に申訳ない気持ちでした。が幸い出席出来た長女から詳しく橋樑を聞き、感じ易い若い心に鮮かに彫られた上田・照井

両先生の子供達への御心橋をその夜も次の日も噛みしめつつ、やつぱり明星へお預けしてよかつた」と、学園への感激が小さな母親の胸のすべの差いも吹き払い、明るい希望を一杯に満たしてくれました。この思いを筆にして、両先生並びに共々苦難に堪えて今日迄子供達の為に下つて下さつた諸先生に、御礼申上げ度うございます。三叉で父を失ひ、未

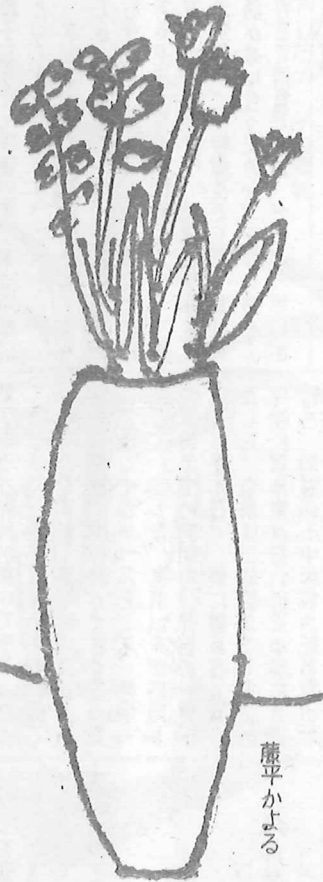
つ子で我侭だつた妹が明星を卒え、五人の母となり、相当困難な生活の中にも明るく顔かに四人の子供を明星に托して勵んでゐるのを見るにつけ、又、同級生の謙微の事をきくにつけ「やつぱり明星は人を作る所だ」と思ふのです。

人聞らしくなれる。」「長くもない人生だ、真剣に生きよう」之等の深い所からにぎみ出る短い言葉を、師への信頼に於て若い心に強く受け取る事の出来る明星の子等の幸を思ひます。神経質で内攻性の四人も子供達の成長の過程に於て、心配性の弱り易い母の心をいつも励まして下さつたのは照井両先生、又それに伴つたのは諸先生の子供等への深い愛顧であり、高校進学後は、青年期の危機

を親しい友の謙微が他校に移つて行く時、彼の心がどんなに迷つたか。「太学受験準備には予備校へやつてやる。明星で人間を作つてもらへ」と父にいわれ、「それでもどうしても他へ行きたいなら無理には止めない」と母に云われ、思い余つた様に時折「お母さん決めてくれよ」と云う子の言葉に、私達も迷つた事がありません。今は彼も着着いて真剣に勉強しています。彼が高校時代、新

る父兄方に、このつたない経験を申し上げ、共に両先生によつて守られる明星精神を把握し信頼し、先生方に協力して、子供達の青年期迄の動搖し易い心を守り育て、誠実な心豊かな人間を一人でも多く明星の門からこの濁れる社会に送り出したい。この一言です。言あげせず、黙々と三十年間を只子供等を誠実な人に育てる為、あらゆる苦難に堪えて下さつた先生方に報ゆる事の出来ずるのは、只この一つであると思ふのです。会報

藤平かよる



「丁号山本鶴代様の「進学と親の気持ち」嬉しくございました。お互に親子共々励んで参りましょう。」

である子供を親の及ばぬ深い理解を以て手を取つて導いて下さつた上田先生、並びに諸先生の云い尽し難い心橋でありました。先生方とのあの時、あの事、数々浮んで感謝の涙が止りません。

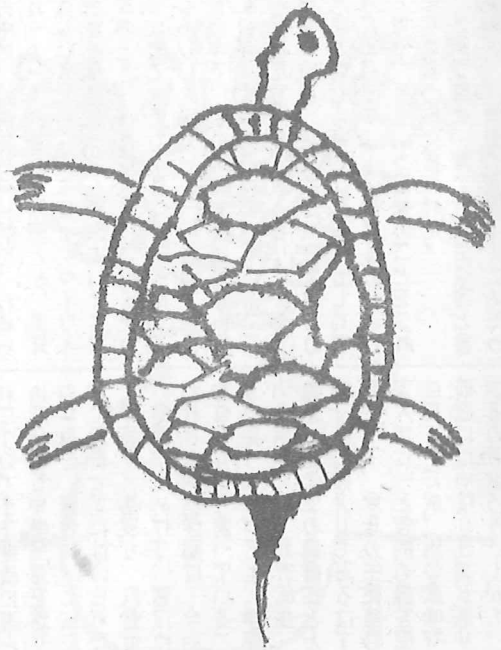
思いは又、明星教育に就て父兄、園の外、又学びつつある子供達の中からも、様々な批判が時々聞える事が御座います。学園に感謝と信頼をもつてゐる者の私にも、たゞしがずに居られぬ瞬間もありました。長男の高校進学の時、九年間一緒だつ

しい人生の出発に、明星精神の真の泉を汲む事が出来る様にと祈る此の頃です。折にふれ「明星へ行かせてもらつてよかつた」と既に世に出た二人の娘が云つてくれる時、それだけで私はホッとします。もともと明星へお預けしたのは、両親の足りない事を思ふ故に、それを補つて少しでも誠実に豊かにのびして下さる学校にと思つて始つた事、その願いを満し

て下さつた事は感謝に堪えません。この至らない私に恵まれた感謝の中から頼られる事は、今迷つて居られ

がいました。私学の経営の困難、又先生方の御心橋を理解し得ず、ともすれば迷ひ腐ちた父兄の心、更にまたこれほど真実を備けて下さる先生方の御恩に感じ得ない子供達の中にあつては、御心も傷む事と申訳がなく存じます。此處、赤井先生の学園復興はその経営に於て必ずや大きな力となり、照井、上田両先生の重い肩の荷を軽くして下さいと信じます。

子供等の真の成長の為、三先生の御健康をひたすらに御祈り致します。



(302) 中村

一つの想い出

福鎌 忠 怒

人の記憶とは妙なもので、大切なことだから、いつまでも覚えていてとは限らない。むしろ、ふとした些細な出来事の方が、のちのちで頭の中にこびりついて、大きな影響を及ぼす。この現象はことに、今はやりの言葉を使えば、思春期において激しい。思えばすでに廿年も前の事であるが、私も明星中学（今の高校）時代の生活には、無数の想い出がある。

昭和十年前後といえは、日本の社

会にいよいよ戦時体制が強化され始め、軍国主義の風潮日に日に旺んになりつつある時代であった。それなのに、今想い出して見ると、あの頃によくもあんなに呑気な中学が存続したと不思議なくらいの雰囲気がある。明星学園には溢れていた。自由とか、社会とかいう言葉そのものさえ白眼視されていた世潮の中で、自由教育を標榜してあくまで押し通された赤井先生、上田先生その他諸先生の教育に対する至純の御信念と御気魄が如何に互向の右翼的空氣と激しい斗争されたかをわれわれが切実に感得できたのは、もちろんはるかのかのちのことであつた。当時のわれわれは生意氣盛りの半大人で、諸先生方の御苦心などまるで分りもせず、辛くも譲られた学園の雰囲気の中にのびの

びと暴れ廻り、それが当り前だとさへ思つていた。今更ながら社会人の一人として、それに何の因果か、学生諸君と生活する仕事に就いて、始めてあの暗い時代と、その中に唯一つの明るかつた明星学園を回想してみても、諸先生の御苦勞に思い至り、唯々頭の下る外はない。

断片的な想い出は、いくら書いても尽きないほどある。これらはいわゆる追憶というもので、多分に感傷や情緒が加わるので、美しく美しくはあるが所詮、私個人の青年の日の夢物語にすぎない。例えば、学校前の上水の曲り角では、よく水死人が上つた。特に、ある春の日、若い女の死体が水底の方に引かかり、その赤い着物と、長い髪の毛が水草にからんで、透明な水の中にゆらゆらとゆらいでいた景色——オフェリアの最後はこんなたつたらうか。などど文学青年じみた感傷でつくづく眺めたこと、冬の寒い朝、公園の池の表面から一面に蒸気が立上り、その中を通つていた木の長い橋（當時は木製の橋であつた）を渡つて行くと、何か夢の中の世界の人になつた心地で、誰かの風景画にこんな光景があつたなあ、とどの度か思ったこと。もつと中学生らしいのでは、夏になると長い棒の先に小刀を縛りつけ、学校附近の畑に胡瓜を取りに行き、小使さんから、歯が痛いのだと云つて歯を貰つて皆で食べたうまで。秋には公園附近のすすき原に、アベツクが沢山出浅するので、学校帰りに

二三人でわざわざ遠廻りして、彼等を見付けてはその面をどたどた馳け抜けて、今思えば気のきかない邪魔立てをしたこと——等に、春夏秋冬、追憶の種は尽きない。

しかし、唯一つ、私の人生航路に決定的な影響を及ぼし、半面、それ自体、明星三十年の厂史の半面を物語つてみたい。卒業間近の冬の一日、十何人かの卒業生は、二三人ずつ交代で赤井先生より御招待を受けた。その当時先生は中学校では修身を愛持つておられ、優しい反面、仲々厳格な、つまりわれわれ悪童にとつて正直云つて痛い存在だつた。いづれも一筋縄でいかない連中揃ひのことゆゑ、この御招待には皆一寸開口した。と云つて間もなく卒業のことではあるし、まさか今更一人ずつ叱られもしまい、それに二三人ずつ一掃だから、何といつても心強い、などと力んでゐても、やはり一寸気がかりである。すでに、無事御招待の済んだ連中に様子を聞いてみると、不思議に皆何とも云われない。「うん、スキ魔の御馳走になり、色々雑談しただけさ」などと妙に口が軽い。変なことだな、と思つてゐるうちにもついに当日になり、私も他の二人と一緒に校長先生とスキ魔鍋をつつく次才となつた。

女学校の裁縫室が何かの豊敷の部屋が会場であつた。先生を囲んで三人が堅くなつて坐につくと、この日の先生は、いつもの修身の先生とは

まるで遭う。始めから「ニコ／＼」と笑顔で「やあ、皆もいよいよ一人前になつてお目出度う。」と仰有つた。思いもかけない大人扱いに、くすくすやつたい乍らも、一寸良い気になつてわれわれはたちまち心が和やんだ。そして、やれやれこれなら安心と三人が三人とも先生の温顔を注視したとき、先生の細表情が、ふと曇つた。われわれは皆、なぜかドキリとした。と先生は「だがね、大変な時代だからね。」と自分の胸に言いきかせるように呟かれた。この時、先生の胸中に去来したものを見抜くには、われわれはまだ余りに年少であつた。しかしその御表情と御口振りが、表現しようもない氣形の矢となつて、われわれの胸を貫いたのである。

それからそれは、先生独自の座談の中に、愉快な談笑が続き、われわれ一人一人は將來の希望とか、青年らしい夢とか、ガヤガヤ、ワイワイと宴が果てた。そしていよいよお別れのとき、「君たちはいよいよ世の中に出て、色んな目にも逢うだろう。しかし、人間の一人一人には、この世の中で、その人にしか出来ない天賦が神から与えられてゐるのだ。だから君たちも、そのつもりで、まず命を大切に、次にはこれこそ自分の天賦と信じられる仕事を見出して世のために尽すよう心掛けるのがよいと思う。」という意味のことを、これまた速報の速に言われた。

大変な時代、命——先生は命と言われた——天賦の発見——この三つ

の言葉は、恐らく先生と一緒に、スギ焼をつついたすべての卒業生の頭に残つたに違いない。そして、このとき受けた一種異様の感銘は、その後の生徒に言い現わし得ない何かしらを暗示したに相違ない。命を大切に、という先生の御言葉は不幸にして危惧には終らなかつた。われわれの同窓として卒業した中の幾人かは、あの狂乱の時代の犠牲となり、祖国の為に殉じた。文字通り、大変な時代の渦中の喉中で、先輩、後輩の何人が、天賦を光見する余裕もなく戦陣に骨を曝した。それに付いても、当時目出度い卒業を祝いつつも、それら青年の前途に横たわる大きな暗雲を目にされ、先生の御胸中はずいぶんなだつたか、と今想ひ出しても想像に絶えない氣持がする。また、それだけの大きな愛顧に譲られつつ自由で快適な中学生を送りえた自分の幸福を、筆舌に尽しがたい感謝の念で追憶せずにはゐられない。

年移り、星変り、凡雪廿年、時代の怒涛にもめげず、暴風にも倒れずわれらが明星学園は、今やますます独自の存在を誇つてゐる。廿年の年月の距りはあつても、学園の底を流れる精神には、赤井先生、上田先生始め、諸先生の御優待とともに本質的な変化は少しもあるはずはない。幸にして、今日の生徒諸君には、「命を大切に」と告別の辞を受ける心配はない。だが、別の意味で、日本の前途にはやはり狂瀾があり、疾風があるであらう。しかし、私は私自

身の小さい体験から考えても、明星の教育がいかに一人の人間の本質に深い決定的な働きを及ぼすかを、信ずることが出来る。「われらつどうこの水上」という校歌は、私の在学中出来たものだが、私は今でも、ふとした時、これを口ずさみ、何とも云えない感激で涙ぐましくさへなることがある。そして、小学校の星教の部屋と赤井先生のあの日のお姿、さらに生涯の恩師上田先生の温顔、いつも清らかな水の水、公園の池等には走馬燈の様に想ひ浮べ、追憶や感傷や、回顧の入り交つた感情の中に、一つの力強い希望と安心を窺み取ることが出来る。

今の私には、まだ一つ、諸先生の御恩誼に對し申訳けないことがある。それは天賦を必ずしも十分に尽してゐないからである。しかし、かつてあの水上につどつた一人として、そのお教えが胸中にある限り、私も多少なりとも何時かは網得のゆく人間になれるかもしれない。それに付いても、諸先生のいよいよの御壮健と母校の隆盛を祈ること切なのである。

ものいうこと

物云う事、かく事のおつくうなお母様方、学校への希望、不満など内攻させ、学校から遠ざかる事はありませんか。かく云う自分は野育ち故に、話す事、かく争も止むを得ぬ時、然も思ふ事の半分位が通じる位のものです。その為か益々力にちこもつてしまふ悲しさ、でもここから一寸抜け出してみよつかと荒心しました。真心こめて一行すつから初めようではありませんか。お互にわかりあうために。(けし地)

T・T

はるたけて

このけだるさやばつた花

鎌草あつき

裏山にきてきじのなく

はとやばら

こぼれる道を子等のゆく

はとやばら

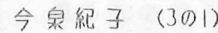
白くこぼれて朝の土

いとし子

山ゆく日なりばら白く

戸坂嵐子

(十四回本)



入学して二日目の午後、窓の外に
若いすが光る教室は仄いぬる気
でしびれそうであつた。

「文語の上二段活用ぢや。——煮る。」に、にる。にる。にれによ……」黒い背広のK先生は知らん顔で読み進まれるが、もううとうとした私達には上二段も上二段もまだかに見分難くてたゞうらめしかった。やがてカラ／＼とM先生（愛称）の振られるひなびた鐘が井戸のそばで鳴つて、あたりは途端に解放郷に薙さふれた。こんな風にして広々とした草むらと林に包まれた私の明星生活が女学校三年生——昭和十八年九月からはじまる。

リベラルな日学院からの転校生である私を明星の入達は好奇心をもちつつも大して気にとめず受け入れてく

れ、私は十日たち二十日たち中に難なく明星つ子に同化していた。

けれど女学生らしく楽しく「よく遊び、よく遊んだ」のはわずかに翌年の五月までで、一級上の人たちと一緒にに私たちはやがて思ひ出すのもいとわしいあの「昭和飛行機工場」に動員されたのである。その日の来るのを知つてか知らないで、その秋から翌春にかけて私は新しいお友達とともによい日々を過していた。その思ひはいつもあの美しい武蔵野の風景をバックにして私の胸にのみか返つてくるのである。そのぐ箱をよみかえて字生から帰る十一月の夕暮には上水のそばの広い畑にダリヤが美しく咲き残つていたし、武者さんのお宅で遊びすぎた或る日臨くなつた池の面に晩秋の濃いもやがよどみ、橋でふいに白い水鳥が私たちのかたわらに浮んだこともあつた。その暮で或る日、カバンをふりまわして餌をおどかしてゐるとき友だちの手の勢が余つて、びしよぬれになつて浮いたカバンをよそのおじさんが呆れた顔ですくひ上げてくれたこともあつたけ。」

女学生らしく屈辱的でしてその流行つたように戦争にわけてもなく屈激する、というには明星子とは余りにも明るく自由で、幾分仲々しすぎていた。B学院から転校した私が学校の雰囲気之余り抵抗を感じなかつた理由はここにある。けれどこうした明星気分の故に楽しかるべき最後の一年を学徒動員によって、いば

り取らず配属得校や、工場での十時間ちかい作業という現実につきあがつて他校の女学生よりもっとみぢめな姿勢で過ごすなければならなかつた。私はとり返すことのできなない。こつしてすぎた大切な時間を本當に残念に想うけれど、それ迄当り前のやうに受け入れてきた明星のよさにふいに気がついたのでした。或る一日である。私は同じ工場に居る下女の友達を探していたが、或るお昼休みB学院の同級生であつたN子ちゃん達とやつと會うことができた。力一千色の作業服をきたN子ちゃんはしばらく立いてゐる中に「動員になつてまだよかつたわ。下高女に専攻して私達巨人とにみじめたつたのよ」と云う。B学院が文部省の開闢処分にあつたとき下高女は編入精英校となり、四〇人程移つてクラス作られたが、つい昔の気分を出して騒いではおこられお話をねだつておこられ、おさげをほどいておこられ数学が出来なくておこられ、(これは私も同であつたが)みんないぢけ切つてわざと半年のうちに死つた人はわすかか多量たらずになつたという。動員になつたとき女子工員寮の一部にN子ちゃんたちは住むこととなつたがそれでも学校でしばられるより余程いいそう。明星ではその眞福生という町の農家を借り平林先生の叔母様にお料理をおまかせして家庭的な愉快な寮を作つていたが、それでも学校に戻れたらと誰しも思つていた頃である。別れる時「結局N子ちゃん

やんが一番華せだつたのよ」とNちやんが云つた。日学院から明星へい勿論転校して随分気分はちがつたが、明星の方が健康でそして足が地についていたので私は私なりに余り矛盾も感じないで明星生活に順応しそして極めてたのしかつた。私は学校というものは私を自由に生長させてくれるものだという風に思つていたから明星の明るさを当り前のように入力してゐたのにこのときやつと気がついたのである。

これが明星のよさであつたというわけである。後年、都立高女を卒業した多くの人を知り合つて戦時中の学生生活が如何にも規則づくめで思ひだすのも嫌」と聞かされたとき、私はいぶかしそうに相手に「吉祥寺にある明星学園です」と所在地まで云わなければならぬけれど、明星生活とは素晴らしいものであつたとその郁庵気がつく。戦争中に与えられた楽しい自由な学校生活。これは戦後考えて想像もつかないほど貴重なものではなかつたかしら。

傷つくことなく、いためつけられることなく、伸々と生長させて貰えた——とこれは卒業生の誰もが、先生達に抱く感謝の気持である。わずかに二年足らずいた私でさえ、そう思つて明星が大変なつかしい、そのなつかしさを支えるように、変りつつ、新しく生れつつ、幾つかの友肩が私の生活を支配している。「ばらは生きてる」の古い時代より伸びが伸びと歴史を説きつづけてきた明星よ。

とのつたない一文が編集部の方々にわたる頃、福生の聲で生れた十人ほどのお仲間が其所に集り悪童気分をよみ返らせて思出話に花を咲かせ、明星を出てよかつたわね、とごさやかに三千周年をお祝いしてゐるであらう。

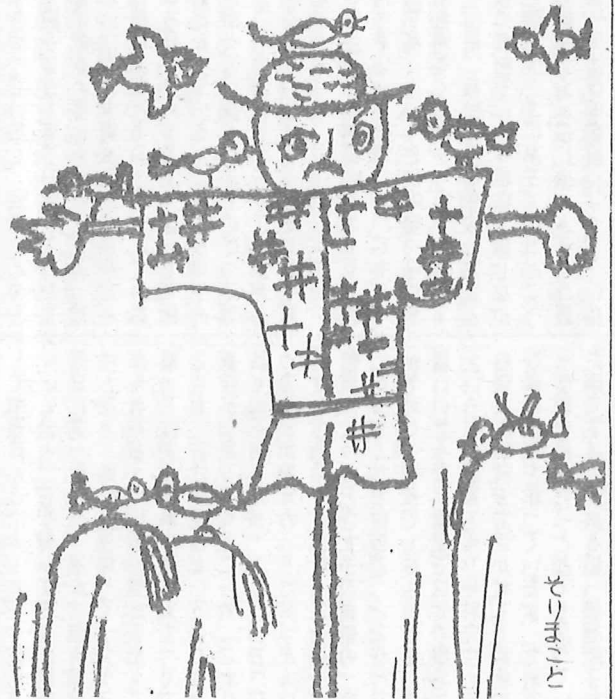
井の中の蛙

小林貞子

学園の幼かつた頃はやはり私も幼かつた。照井先生方は今よりもつともつと自分よりも年上の方の様な気がしてゐたものだ。何所か昔の明星と変つた所は、そんな事を思ひつつ式典に連れ、照井先生と田先生のお顔を見つめる。そなた先生方のおぐしの白く差くなつた事。な程、明星は育つたのだな——としみじみと思つた。

十一年間明星に育ち、更に母親として、我が子と共に明星に育つてゐる私は、全く井の中の蛙で明星におぼれてしまつてゐると見え明星の良さや悪さが分らない。当り前の様なお話を同つてびつくりしたり、当り前だと思つて話した事が変つていたり、そんな経験が度々ある。

先日もあるお母様のお話「この頃やつと販賣室には入る事が出来る様になつたのですよ。だつて私共の学



校時代は販賣室には入る時には最敬礼で帰る時にはひつくり返つて又々最敬礼をしなくては出られなかつたのですもの。誰れが販賣室に呼ばれようものなら不良にでもなつたのではないかと大騒ぎでしたわ」昔と違つて明星の販賣室はは入りにくくなつた等ばんやり考へてゐた私の如何におどろいた事……販賣室のY先生等と最近の映画を通して人生観など話し合つた女学校時代のお話等したらこの方も又如何に驚ろかれる事でしょうか。

新しく明星にお子様をお入れになつた方は「家では子供が余りのんびりして、朗かすぎちゃつて一年生の

間は主人と二人でおこつてはつかりいたんですけど、最近これが明星の子だつたことがやつと分つたんですよ」やつぱり明星ッ子は普通ぢやないのかしら？ 私の考えも又いささか嬉しいみたいなの機嫌な気分になる。明星の外部の方々の声をどしどし伺ひ批判して頂いて私共井の中の蛙は陸に上りたい。

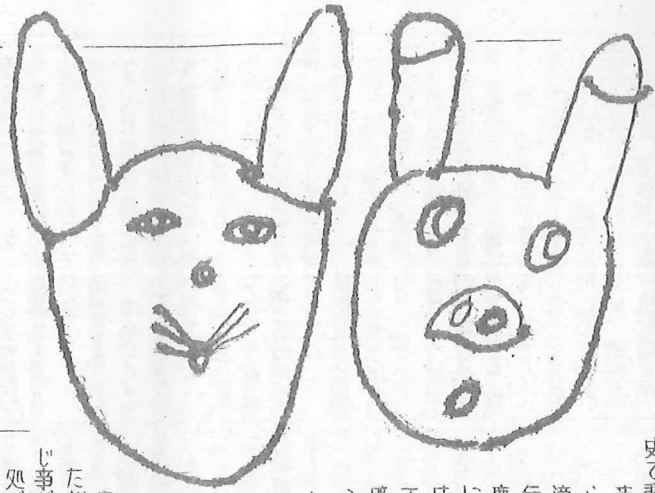
明星モットー

強く——

正しく——

朗らかに——

菅又ス直



明星ッ子は 幸福

荻野 真佐男

(十八回分)

昔、一ノ谷の戦で鶴越の時、源義経が云つたか云わぬか知らぬが、鹿も四脚馬も四脚である。鹿が越えるこの坂道であるから、四脚の馬も越

えられぬ道理はない」という争を、史で習つたことがある。兎がこの論法はよく考えて見ると、講談ならいざ知らず、史実として恰も適切な判断であつたかの如く、

伝えられてゐるから詰らぬ話で、鹿は牛、山羊と全く同じく、若山に住む関係と偏蹄であるが、馬は原野に生活してゐたので、蹄蹄であつて、今も四脚を有し、有蹄類であつても本質的に環境から来る彼等の生活様式は異つてゐる。かかる論法で作戦する大將に率られては、兵卒たるものは浮はれまい。

勿論、若し彼義経が云つたとしても、このこと自体を、何も大げさに取上げる必要はない。それはナポレオンが砂漠を越える時、「オアシスが見えたぞ」と、三里を叱咤したのと同じ事からであるからである。

兎が大事な事は、之と同じ事が物の見方、考え方の上で一般社会の面に如何に社会通念として常識化されてゐるかに学生諸君が、目を開かねばならないと云ふ事であつて、例へばよく耳にする事だが、「自動車の事故率と、航空機のそれと比較すると後者の方が極めて、小なるを以つて故に安全である」と云ふのが、

しかし本質的に両者の間に使用目的、使用方法の相異があり、力学的にも鋭略を興にしてゐるのであつて、事故の性質も又異つてゐる。現象面の事故率のみ相対的に比較しても、唯

それだけの事で無意味であるのみならず、此兎よりして後者の方がより安全である云々決定的な結論を導き出してゐる論法は、早急であり、危険ではないか。

勿論、兩者とも輸送を目的とすれば、航空機の方が長巨商を飛ぶ関係で、墜当りの事故は少いであらう。この場合は墜当りの安全度が高いのであつて、而も単位距離に云う條件の下で初めて云われ、前記の如く安全である云々結論は導き出せない。以上極めて卑劣な例を挙げたが、日常これと全く事例が考えられ、云われてゐるが、現象は原因を本質的に究明せずして云々出来まい。斯る如く事象を二底論理的に考へる要素リアリズムとでも云うかを、知識人と自認する吾人が又知して、いともあつさり片付けて居るかに気付かねばならぬであらう。

この事は現在の如き変り易い時代には特に必要であると思われる。明星学園三十年の星霜。此の間の古の移り変りを見よ。それは治安維持法の公布から、現在の秘密保護法案迄であり、ボラ・ネグリからオーディイ・ハップ・バーン迄であり、又おさげからイタリヤン・ボーイ・カット迄である。神変万化、その尽くる処を知らない。

この社会の激流の中に在つて吾人の感ずる事は物の本来の姿を本質的に適確に捉へることが、世の中の変化が激しければ激しい程、大切な事となり、現在の如き複雑、曖昧な、

又不確定な、確定的な無思慮にも現象面のみの判断で繰りつまたがる。価値を判断する理性の入る余地もなく、価値を命令される事を持つようになる。正しいと云ふよりは適切な価値判断は事象を直視し、本質的に現象に係理、原因と結果の関連性を把握して始めて成されるものであり、而も此の様な判断の物の見方考へ方は実社会に在つて弾力性を失つた吾々の観念を以てしては容易に修得出来まい。それは、学校といふ小社会の小社会人である学生の時、常に厳しい現実の事象の本質を直視する物の見方、考へ方が缺て、良識ある現代社会人の判断力を社会的経験に批判を施して培つて行くのである。

フレーベルの教育原理を夙に消化して、絹々として流れる谷川の如く、清き明星の伝統の中に育まれた明星ッ子は幸福である。然し伝統に甘えてはならない。単に伝統に安住するなら、「ガラスの動物園」の中に在むに等しいであらう。

伝統は之を誇り之を学ぶものに非ずして、此の中に在つて又、之に依つて考え、行動してこそ真に伝統に生きると云ふ事が云えるのではないか。

新しい潮は古い皮袋に入れられてはならない。

三つの言葉

原田麻耶

(七回全国同窓会友)

学校を出て十五年、五年間の生活は、喜びもかなしみも、たゞと彩の霧のようにまじり合つて、どれと云つて区別なく、なつかしく、かがやいてゐる。

その中でたつた三つの言葉だけが、いまも忘れ得ず、私の心に生きてゐる。これが五年間の総決算でもあり、生きる指針ともなつてゐる。

「だまつてこつこつ勉強することくもりガラス窓には、ちらちらえこの若葉が緑の影をおとしていたから、夏休みに近かつたのであらう。三年の尸史のテストのあと、杉山先生が一人一人に返して下さりながら私のノートに書きつけて下さつた言葉。女学校の頃は実行もしないし、忘れてさえたために、学校を出てから時々思い出す。しかし、やつぱり実行は必ずかしい。

「粒々辛苦なり」これもやつぱり杉山先生の言葉。五年のお別れの授業の時御談話にと皆に下さつたもので、昔、田草取りで目をつきそつになりながら、汗して働いたことを話して下さつて、物を大切にしなければといましめられたのだが、織物をしながら、登がどう云う風に編を作り、それから糸をつむぎ、一つの布

を織り上げる迄のことを考えると、何事も、ほんとうに尊いからだと思ふ。

もう一つ、これは余りにも私ごとになつてしまふのではばかりであるが、実はこれが一番私に深い恩銘があるのだから、とばしてしまふわけにはゆかない。二年生か、せいぜい三年の頃の父兄会で、赤井先生が、愛つていて大きくなつたら何かしそつだから教える者はたのしみだ」とおつしやうたとか。私は学校を出てから十年というものの、自分に失望し續けて来た。と申せば、人は私の傷心とその通りには受けとつてくれないかも知れない。気が弱く、才能がなくそのくせ、自分でも何かわからない一念を保持したものの、鬱鬱たる思い、それをいつでもはげまして下さるのが赤井先生の言葉なのだ。十五年間なぐさめ、はげまし生き甲斐となつた三つの言葉を保持している私は、真の幸福者というべきだ。もし今日が少しでも良い方にあるとしたら……これらの言葉の力を私は信じているし、一生を忘れることなくみちづれとなつてくれる言葉だと思つてゐる。



いたづら

西野入尚一

(十回卒)

私が明星に左様ならをしたのは昭和十七年だから、今からもう十二年も前の事だ。その頃の中学校という、電話もなければ、門柱もなく、垣根だつて何処からでも入れる、おつてもなくてもいい極な申訳程度の垣がしてあると云つた調子のものでつた。そういつたお粗末な環境の中に唯一だけ立派な建造物があった。それが羽天体操場である。そこでこの雨天体操場に關する思い出の一つを紹介してみようと思ふ。

あれは確か五年の冬だつた。田舎の学校ののがれられぬ運命として冬などは下がドロ／＼になつて校庭でほとほと体操なんか出来たものではないのである。中学の体操は勿論この体操場を使つてやるのであるが、倉之学園の事として、この一つしかない立派な体操場に必然的に女学校の体操場までも出張して来る事になるわけである。女三人寄れば何とやらといふのが、その十倍の甘人が思ふやう分騒ぐのだから、さあ、体操の時間の賑かな事といつた大変なものである。その上、幸か不幸か五年の教室がこの隅りにあるときではたまつたものではない。先生の話なんか全然聞えやしない。(笑隙はそれ程でも

なかつたのだが「パツちゃん」に怒られた時にさう并解せざるを得なかつた。こゝろ五月端い奴等がしよつちゆう来たんじや勉強も出来ないから何とか巧い方法でまわれなかつたしやうぢやないかというわけで騒動が頭をヒネリ一計に考え及んだわけである。明星に育つてこつちう方の児童は悪るべきものがある。即ち入口から入つたすぐ眼の前の処に等身大の首吊りをした人形を作つておいて置かしてやれというわけである。そこでラケビーの球を額にして帽子を冠せ、教鞭を着せた人形を作つて殆も首を吊つてフタ下つてゐるかの様に上から下つておいたのである。さうしておいてこつちは教室に入つて平氣な顔をやそい議論を聞きながらワク／＼して女学生の御入場を待つていたわけである。その頃の女学校の体操場の先生は健徳龍崎一郎の奥さんだつたと思ふが先生に連れられてワイ／＼ガヤ／＼とやつて来た女学生達が、吾々の期待通り或はそれ以上キヤ／＼という物凄く悲鳴をあげて呉れたので悪童の方でもワ／＼と喜ぶの聲を上げた聲は次才である。その時の様子が何だかサッパリ覚えていない処を見ると全神経を体操場の方に向けていたらしい。あとでパツちゃんにコテン／＼と怒られたわけだがその悪童連ももう甘えになり親父になつてゐるものもいるし、やられた人達もいとお母さんになつておられるだらうと思つと、全く慰撫無量である。

喜びの日を前に

清田 宏子

(二回 平小五の母)

今から丁度三十年前の大正十三年五月十五日、その日は朝から土砂降りだった。世に連れられた私と妹は、雨に濡れて、一際輝かしい緑の美しさに目を見張りながら、勿な心にも希望と喜びに胸をふくらませて学園の門をくぐったものだ。

新しい教育の理想に燃えた四人の先生方と、二十一人の子供達とどの父兄とにとつて、小さな学園は呱呱の声を挙げた。未完成の校舎は、式の最中も絶えずばた／＼と雨漏りしていた。あの時、居合せた誰しもがあの印象深い雨を長く忘れる事は出来ないう。

今は大阪で高校の校長先生をして居られる山本先生から校章の説明を伺ったり、皆でおすしをいただいたりしてから、はれ間を見て、校門の前の杉林で記念撮影をした。

翌日から真剣で楽しい私達の共同生活が、武蔵野の一画に営まれ始めた。当分の間一年から三年まで、一つ部屋に仲良く、それぞれ先生を囲んで、寺小屋ながらに勉強したものだった。私達二年は、たった五人きりだった。

今の休養室がその頃の職員室で正面の窓際にはいつも、げん先生がど

つしりと座を占めて居られ、そこに先生のお姿が見えないと、私達は何か適の抜けた様な淋しさを覚えたものだ。裏には当時の明星に忘れられない存在として小便さんの武さんというおじさんが任んで居た。中々の人気者で、私達の古話を本当によくしてくれ、照井先生から震災の時の小父さんの美談を伺って皆尊敬さへもして居た。

その頃の公園は、うつそうとした杉の大木が立ち並び、雨の日等は、こわい程、静まり返つて居た。がお花見や、栗飯の頃には、のれんを下げた池畔のお茶屋も、中々の賑わいを見せて居た。黒門から、平山博物館の前辺り一帯は、雑木林で、春には金蘭、銀蘭、草ばけ、つばすみれ等が咲き乱れ、秋はまばゆい程の芒の波であつた。学校の隅り、花摘みに夢中になつて、時の経つのも忘れてしまつた事等もあつた。

大抵の日には勉強も食事も戸外でなされた。日光も草木も校舎も先生も、私達子供も皆、新鮮でびちびちとはわかえるようだった。

今のレンジ工場の辺り（私達は校橋のグラウンドと呼んで居た）から、武者小路先生のお宅辺りにかけては雑木林の間にも広々とした草原があり、そこは静かな勉強の場所にもなり、刷のけいこ場にもなり、海戦遊戯の舞台にもなり、楽しい茶話会のお座敷にもなつた。私達はこれの広々とした武蔵野を全く我が物顔に占領し、その学習や生活はこれ等を

最大限に活用してなされた。或大雪の朝、道のつけられていない杉林の中で、膝まで浸る深い雪に長靴をとられ／＼して、私はやつとの思いで学校にたどり着いた。果してその日は登校者もごく僅かで、先生方が御ほうびにと豚汁を御馳走して下さつた。霰々と降りしきる雪を外に、この豚汁に、私達の身も心もしんから温められ、子供心にも、その喜びをしみ／＼と感じたものだ。

校舎が次第に整えられるにつれ、門の所には緑の馬車道しが設けられ小鳥や猿、山羊、密蜂等も飼われる様になつた。又、私達の手で庭に池を掘り、水蓮を植えたり、二人で一組の花壇や、畑等も作られた。皆が飯で耕し、種子をおろした大地にはやがて沢々とした美しい花が咲き、絶えず教室を飾つてくれた。或夏、照井先生と御一緒に皆でこやしをやつて丹精した収獲として、水々しいトマトや胡瓜、茄子等皆で持ち帰れない程とれた。

その喜びは洋服にはね返つた、こやしの匂もこして気にかからぬ程の大ききで私達の心に返つてきた。汗の貴さ、勤勞の喜びを私は始めて知つた。あの頃の特殊な私立学校で肥かつきまじした所は、恐らくないと思う。講堂を持たなかつた私達は今の二年の教室の前の廊下を舞臺に剣を演じ、芝生は観覧席となり中々親しめぬ光景であつた。未だ児童劇の珍しい時代で照井先生作の「こぶとり」「おもちゃの国」すくな

びこの命」「おるち退治」「月夜の小鳥」等、皆この廊下の舞臺で演じられた。

又あの頃は教科書はなく、全部先生の手になるフリント授業であつた。毎朝、山の様にフリントを抱えて教室へ入つていらつしやる照井先生のお姿が今も思い出される。私達は熱と理想に燃えた先生方の最初の実験台として、本当にのびのびと自由に育つた。

しかしそのかげには、子供の預り知らなかつた突に血のしみ出る様な先生方の御苦勞と、その辛苦をわかちあつた父兄の力のおつた事を後になつて始めて母からきかされた時、私は本当に胸が一杯になつてしまつた。現在に比べれば、凡てに小規模で乏しい設備の中にあつた、精神的には、大きな収獲に恵まれた事を私は本当に感謝している。三十年という月日は長い。その間には色々の事があつた。が先生方の教育に対する強い信念は、凡ゆる障害を克服し、遂に実を結ぶ日が訪れて来た。

十六日の佳き日を前に、私の頭の中は三十年前の雨漏りのささやかな囁校式の事でいっぱいだった。まして赤井先生、照井先生方の御恩はどれ程だろうか。あんなに明星を愛して居た母はもう居ない。私はお招きを受けた父とお祝いの式に参列し、御病氣の高、今日の喜びを共に出来な親しいお友達の分も合せて、心から「明星学園おめでとう。」をいおう。

星のまた、き

大島 信子

(四回卒)

多くの卒業生の中で多分私が一番はじめに子供を学園から集立たせ、同じ明星会の会員として席を同じくする日もそう遠くないと申し上げたら驚く方も少くないと思います。

大東亞戦争の開戦間もない春に長男を学園の一人として加えて頂いて以来、既に三人まで小学部の課程を終えて、それぞれに高校へ中学へと進ませて頂き今は春は新一年に次男を加えて頂きました。

戦後の混乱の中にあつて、考へるところあつて家庭と仕事の両立のために至らない乍ら戦つて来た私にとつて、今日迄の間、心さがる思ひでであり乍ら多忙故にとどかない子供達の家庭教育の欠陥を補つてあまりある豊さを以て学園の教育がぐんとできて下さつた事は何にもかへ難い感謝でございます。

三月の小学部の卒業式の折に久しぶりに接した少しお年を召された感はあるけれど、お元氣な赤井先生とステージの上で楽しそうに踊つて居る我が子と、在学中の或日の私が不思議な関連をもつて私の胸の中にはのびのびとしたものを味わせてくれるのでした。

多分私が中二の学年末であつたと

思ひます。春もまた深い窓辺の桜草のホノリした色を忘れる事が出来ません。病氣でお休みでいらした赤井先生から私に学校の様子をお宅に廻る様にとの事でした。

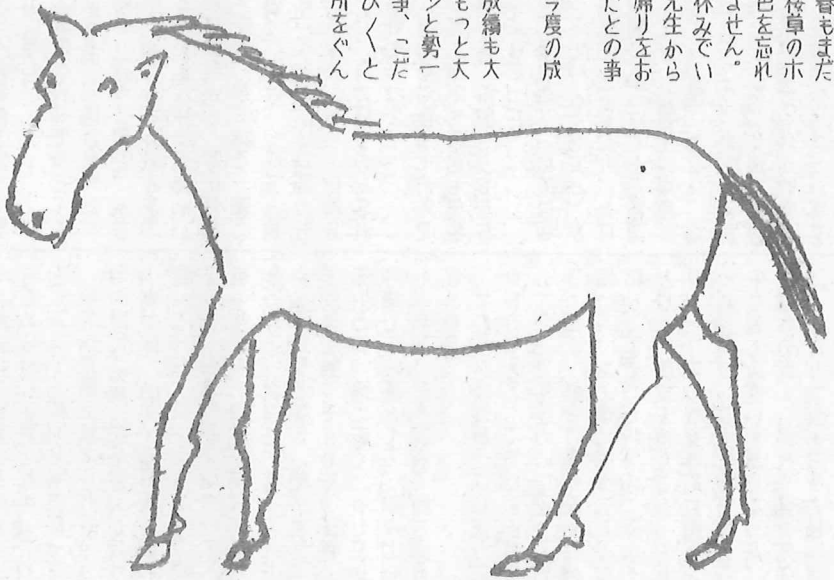
「どう、今度の成績は、」

「そう、成績も大切だけれども切な事はグンと勢一杯にのびる事、これわらずにのびく」と自分の思ふ所をぐんぐん歩いて

いく、ちがいかんでいいでね、と仰有つた。

その後先生のこの意味の深い言葉が私自身の中に

どんな風に育つていったか、思へば当時小学部を経ないで中学部に入つていつた私が所謂「明星ッ子」とはおよそかけ離れた存在であり、先生の胸の中に青々とすんなり出揃つた春の穂の中のくろくろんぼの様に憂いの影を止めた事だつたのでしよう。それから二十年近い時を経て、あ



友 田 攻 (302)

く、その子自身の持つ力を、良いものを勢一杯に明るく力強く表現していく事が出来る、幸を事だと思ひます。上の二人の子供たちについてこそそれだけにこの幸な力が陪われている事を考えると、やさしい事の極で容易でないこの事をこころで頂いてとあらためて厚く感謝に充たされるのでした。

「そこで貴女自身についてはどう？」と仰有られたらどうであらう。はつきりと「ありがとう」でございます。明星叔に今の私は支えられて居ります。と申し上げるでしょう。めざましい成長ぶりではなかつたけれど、何時の間にか込み込んで来た明星精神が卒業、結婚、戦争、育児、仕事と次々と又同時にふりかかつて来る時、此等の問題を何気なく受けとめかなり困難と思われる場合にも、あまりこたわらずに切りぬけていくのです。

「私なんかがね」と自分で置く場合も度々ありました。

こつして時を経て、又時と共に私の学園に対する信頼の深められて行くのです。

問題ははいよいよ錯綜し、混乱の内にともすれば足をさらわれ勝ちなこの世界状況の中にあつて私たちがどうなければならぬのでしよう。

はつらつたる心身の健康をたもち、高められた知性からほとぼり出る正しい、建設的な意見を互に交し合いつつ、より高いものを目ざして、過去にこだわらず、人は日々新に

生くる事を得るものである事を確信して、人生の極みまで一人々々が成長の課程を歩んでいく事ではないでしょうか。そしてどんな仕度にあつても人のために何らかの役に立つものでなければならぬと思ふのです。

その様な人生を歩む上に、明るく、朗らかに、と云う学園の教育目標は必ずしも太い力となつて運動するであらう事はうたがふ余地のない事と思われるのです。

——学園三十年の尊い歩みを心から慶祝すると共に、輝く群星の中にあつて、やがてながら私どもの群れに更らに光輝をそえるものであり度いと希いつつ——。



今こそ大自然を敬愛せよ

——明星精神の一つとして——

武者宗一郎

(二回半)

学園創設卅周年ときき、心からなる祝詞を申し上げます。しかし、私は、その卅年間が明星にとつて単なる

甘い順調な卅年であつたとは決して思つては居りません。その蔭にあつて明星の創生時代や終戦後の苦境をよく乗り切られた赤井、照井、上田三先生の涙ぐましい御努力は、けだし他所にある者の計り知れぬ処でございます。

不肖、私も亦大阪府立の大学に在つて教壇に立つ者ですが、矢張り学校のマネー・ジメメントというものが有形無形に突在することを経験しております。併し予算が公費で支出される奥で私共の苦勞というものは、三先生方の御苦勞に比すると恰度、親子のそれと似て居る様に思えてなりません。同じ教員者としての使命を果す上に明星の先生方なされた別面の御努力に対しては、今にして思えば、誠に勿体ない事とも又、相すまなかつたことも存ぜられます。吾々明星に教を授けた者として、今後、その様な苦勞が少しでも軽減出来る様に努力すべきであると思つて居ります。私は大正十五年に明星に御厄介になり始めましたから成程卅年近く経ちました。その頃の明星の方針は「進歩」ということと「生」という一語につき一切の偏向がなく、日本で稀に見る民主的な学園であつたのが誇りと共に思い浮べられます。自然を尊重する精神を私は明星から授つたと今でも疑つて居りません。昔聞からは有閑学校かの様に目されていた明星のオールの正課に「百姓」があり、運動会には丹精した卒が母の会のお出様方の玉の様な肌で洗わ

れていたとは。

近頃の自然無視の傾向はまことに憂慮に耐えません。都会文明と称し便利と名打つて今日の社会がなしている業の中にそれが見られます。私は寧ろ此等異常に発達した多くの技術、例へば印刷、電波放送、宣伝広告、通信、そして其等の集であるラジオ、テレビ、新聞等々を惜みなくごえもなることがしばしばあります。人間一生六十数年間に悠々人生の体験をつみたいものであると考へている人々にとつて、此等所謂便利な所産は果してどの様に作用してまいりましょうか。汽車に乗れば野も畑も山も大きな広告板にけがされ、新聞は覆認する時間が無いという理由であらまいに記載を書き並べる。ラジオのスイッチをひねると宣伝文句を暗記させられる。見なくなきを見せられ、聞きたがらざるを聞かす。為に吾々は単位時間内に受け入れるべき経験量の過剰に溺れ深く広い知識の上に浮び、次ぎ次ぎに思案がはばまれていくのを感じます。研究蓄積といふのは人間の持つ本性の一つで阻止、制限は出来ません。しかしその精華を利用する場合は大いに注意せねばならぬのであります。日本人の自然増加は一年間に一縣の人口に当ります。人間が人間を生み繁殖して行くのは理の当然でありま

自然を尊重し敬愛して行かねば神の意志に反する日が置からずやつて来る様に思えてなりません。吾々は麴奴にイースト菌を植え付けて酒を得て居りますが、イースト菌にとつては、ブドウ糖が食物であり、アルコールは排泄残渣なのです。彼等はその排泄物が十数%に達する時、自家中毒を起して了うのであります。今日、吾々都会人達が自らが考案した便利な所産の故に、ハトハトになり身をすり切り乍らあえいでいる姿は如何にも哀れであり中毒一步手前のイースト菌に似て居る様に思えてなりません。

人間が原子力の秘密を探り出したことは何となくその期が近いのを想わせます。今日の文化の恩恵を一切受けることなしに生活をすることは名実共に許されぬ処であります。依つて今こそ私共は大自然をお与へ下さつた神に感謝し、自然を愛し、大切に役わらせて戴かなくてはならないと考へて居ります。

明星で教へて戴いた結果が私に以上の様な事をいわしめて居るのである事をつけ加えて筆を擱きます。諸先生方、卒業生各位、在学生諸君の御健康と御奮闘とを遙か河内の国よりお祈り申し上げて居ります。

(二九・五・一一)



御苦労を

思うて

久保田 高明

(昭一四・中卒)

学園の皆様お元気ですか。全く眠
かしくなる程御無沙汰致してしま
いました。ずいぶん色々な変化が世
界の上に、また日本の国に、そして
私達の身の廻りに走りましたが、こ
の間に学園もまた三十年の歴史を刻
むこととなつたわけなのです。平
業生の一人と致しまして、心からな
るお祝いの言葉を申述べてさせて頂
きます。

正直に申し上げて、私は学園の創設
記念日も三十周年を迎えるというこ
とも全く失念致しておりましたから
もしもPTA編集部の方々からその
旨のお知らせを戴かなかつたとし
たら、私が幼年時代、少年時代の
夙てと青年時代の半ばを過ごさせて戴
いた学園の追想を新たにすることは
恐らく望みえなかつたのではないかと
存じます。

とは云え、な人と不心得な輩であ
るか、とお笑ひ下さいますな。こん
な不心得者でも、ともかく一言のお
祝いを申述べてさせて頂いては、殊
勝な気持ちを持ち合わせていた晴々左
酌量の上、何卒御赦宥下さいませ。
ところで、我が田に水を引く類とも

申せましようか、私如き誠に不心得
者ですら恥をも省ず、御慶祝の筆を
とるべく改悛せしめたものこそ、と
りもおさず、物質的環境には恵ま
れざる(誤つておれば御容赦願いま
す)学園の昔も今も変わらぬインヴィ
ジブル・トレジユアではなかつたか
と考えるのです。

故て、私が小学校時代を過しまし



竹内 将児

心画面に亘つて御苦労の多かつた時
期ではなかつたか、と今にして想う
のでありますが、私達は学園にあつ
て本当に伸び伸びと、それだけ充分
学業に励むことが出来、他面とてつ
もない悪戯もやらかしては先生方に
云いしれぬ御面倒をおかけしたもの
でした。

現在のこの時期もまた、私達の時

たのは昭和三十八年頃であります。今
から思えば日本が経済恐慌のさな
かにあつて極めて苦しい時代であつ
たはずでした。また中学時代の九
十三三年頃も、景気が漸く回復に向
つたとはいへ、満州事変以来日華事
変を経て太平洋戦争へ至る、いわゆ
る軍戦時体制強化の激動期に當つて
おりました。従つてこの時期は、学
園の諸先生方も両親達も恐らくは物

代とは及びもつかぬほど変動と悩み
多き時代であります。時流は星は
移りまして、人は集りまた散じま
しても、丁度かのフランス革命の暴
動のさなかにでも街の一遍の教会堂
の内には静かに祈りを捧げる一群の
人々がありました。如く、学園に結ば
れる方々は今なお幾多き武蔵野の一
隅にあつて、昔も今も変わらぬ眞実の
自由な空気を吸いながら、人格の陶

汰と字の研鑽に励んでおられること
を確信致しております。
学園の皆様御多幸をお祈り致し
まして筆を擱きます。

先生方へ

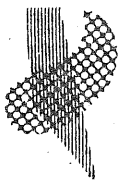
「子供達はお前に仕かせるぞ。」
等と放言する父親も、子供や母親の
時々持ち帰る先生の噂話から「あの
先生方は本当に子供が可愛いんだ
なあ。」と感嘆します。

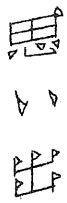
まあ、この奥だけで学校につなが
つてゐると云えましようか。何の知
識もないものが、儼然と争も云え
ませんが、教育も愛情が根本じやな
いかと思ひます。

そこで心配症がそろそろ頭を持ち
あげてきました。先生のその大きな
愛情の手からこぼれた子供はいない
でしようか。

「これ以上怒張りな」と仰言らな
いで下さい。残された方にしてみれ
ば大変です。子供等をしつかりつか
んで下さい。さうすれば親など、黙
つていてもついていくでしょう。

(けし地)





鹿島茂男

(新高一回生)

一昔前の学園創設二十周年当時、僕等は中学二年生で、毎日ゲートルを巻いて工場に勤員されていた。それが三年後には、始めての男女共学で何となくそわそわした毎日を送っていた。

高校での男女共学は、僕達が最初である。新学制がしかれて、中学卒業と同時に高校三年となった明星三十二名の男子は、同じ途をたどった女子十一名を川向うから迎えて坐席をどう決めるかで一苦労をした。結局クジで決めることになったが、僕の当りクジが一番前列で、隣席が女の人ということになってしまった。一緒に並んでいた三ヶ月の間、僕はテレサだったので、殆んど口をきかなかったが、これは確に珍記録だと思つてゐる。それが災いしてか、卒業前に書き合つたサインブックに「鹿島さんみだいにコワイ人、今まで見たことありません」と書かれてしまい、今でも手紙一本もらえない。共学時代には皆それぞれ多種多様の経験を味つたようだ。甘い噂もいろいろたつた。

受持ちの關係で大部分の者が最も鹿山先生に面倒をかけた。増えた白

髪を僕等の髪のもとかえてあげたい気がする。先生と云えば入学当時、端正なツメエリ姿の下野先生を小使さんと間違え、一時同目の多湖先生の時にはベントウをバクツキ、田口先生のビンタの回数が学年が進むにつれて少くなり、そして雪の日、堀先生を組つたいたずらが上田先生にあたり、物凄いかみナリを聞いたことなど本当に昨日のようだ。そしていたずらの張本人だつたM君が、今では大真面目で貿易会社に勤めてゐるさまを想像すると、何となく笑ひ出してしまふ。

一緒に通つた友達も、今ではその殆どが大学を出て就職し、外国に行つてゐる人もあるし、或る人はお嫁に行つて名を変えてしまつた。その中で大原君だけは驚かされた。いつの間にかバレーを習ひ、そしていつの間にか稲秋子バレー団の首席男性踊り手として活躍してゐた。在学中の彼はひよろひよろとやせていたが、彼について思ひ出すことは、授業中漫筆を書いてはよく僕に見せてくれたことで、その筆は仲々上手で、漫筆家になつても食えるな、と思つてゐた。

あれこれ書いてゐるうちに、一年間ほど一絶だつた坂元康人君を思ひ出した。図書委員として地味な仕事をコッコッよくやつていたが、もう二度と会えないのかと思うと何とも云えない気がする。ちよつとの間にもしいろいろなことが起る。明星三十年……その間のことを赤井先生、

上田先生、照井先生あたりから明星物語として聞かせてもらいたい気がする。

総会
出席者

西村郁子

明星が始つてからもう三十年になりました。総会の日、私は遠い過去にの楽しい夢を追う様な気持ちで、子供達が明星に通つてゐた頃を思ひおこしつなつかしい校歌をうたいました。あゝあの頃の面影はどうしていらつしやることでしょうか。

競争と憎しみの世界から脱して、平和と愛情のうちに豊かな情操の教育を受ける子供達の幸福は、この学園の中に育つ者の受ける恵みである様に思えます。大人のみにくい争の世界を、どうしてこんな可愛い子供達の上に展げられましょう。こんなことを考えながら曾て子供の歌つた歌を、今若いお母様方に送つて自分も高らかに歌つたことでした。そのあと、西村さんのお母様ではありませんが、若い美しいお母様にお声をかけられました。あら内藤さん陽一の娘のおとなしいお嬢さまでいらつしやうたこの方が、今では一人のお子孫のお母様としてここにきておいでになるのだとは、私も年をとつたものでした。こゝ甲せば赤井先生

もお年を召され、照井先生のお嬢も白くあの頃の幸福な子供達の上にもみんな戦争や終戦の苦労がかぶさつてきたことではないでしょうか。中には昔の幸福な夢の破れた人達もいらつしやるだろうかなどと思ひながら四方山のお話を承りつつ帰途につきました。

どうかこれから戦争などという事もなくこの学園に通う一人一人の方がみんな明るく幸福な人生を過して行かれるよう心から祈りました。この際私は子供達をお喜下さいます。先生方へ改めて感謝の気持ちを申し上げたいと存じます。

長女のお古話になりました須田先生は三人の子の母になつた娘を今も変りなく励め励まして下さいます。何の御恩返しも出来ない親子の上にいづまでも人同としての愛を注いで下さる先生にいつかはお目にかかつてお礼やお詫を申し上げたいと思ひでいます。照井先生に長男は御厄介になりました。今もなお学園の主としておいでになる先生御夫妻を争あらためて申上げる迄もございませんが立派な教育者として深く感じ入つてゐるのでございます。安藤先生は京都府舞鶴の家へも十数年前お訪ねいただき、つい先日にも上京した序にお立寄り下さいまして今尚子等の成長を我が事の様に喜んで下さいました。この様な先生方をいただいて居ります事の幸福をしみじみと感じつつここに慎んでお礼を申し上げます。

功 勞

恩地邦郎

四月には一年の担任だから書けといわれ、今度は表彰されたから書けといわれ、編集部に入る前は気楽にかけたものが、数日後の剣を控えて頭につつかえてしまふ。これが功勞というもののかな。

二十周年記念式の時、十年勤続者の表彰があり、よくもまあ、つとめられたものと卒業してすぐ母校に戻ったものとして感じ入ったのであつたが、今度は自分の番になつた。

何故こんなことになつたのか考えてみると、何時も明星のことが一番気にかかつていたと云うより他はない。式典の日には何年ぶりに合う友人、古い先生、昔のお母さん方、それにいつものおつきあひ、あの人もいる、あ、この人ともゆつくり話したいなどと思つてゐる間にばたばたとすんでしまつた。

しかし午前の慰愛祭に学園の物故功勞者と共に戦死した弟・友人が合祀されたことがうれしいことでもあり、感動的であつた。既成宗教によらぬ、神式と云うより新式で行われたのもよかった。

同期生でも特に気の合つた下中、江川西君が亡くなつたし、フクチン、オデコ等と卒業生として剣をあの舞

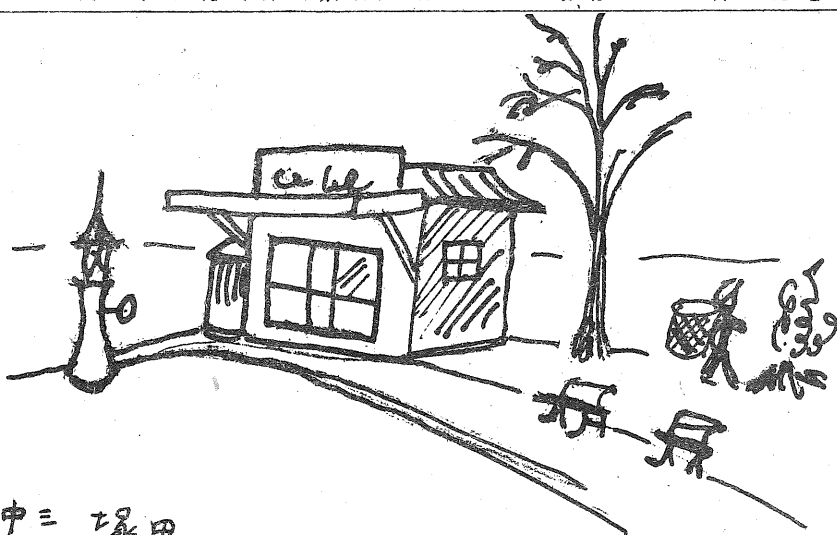
台で演じたり、男声のレテットのメンバーであつたシミケンとマサベールも戦死してしまつた。

シミケンとは清水育夫君のことで、独立の島家清水意志さんの一人息子であつたのにワイリッピン沖海戦とやらの犠牲となつて、それで氣を落されたのであろうか。間もなく意志さんも亡なられ、お母さまの心中はいかばかりかと思ひながら御無沙汰ばかりしていたが、あの日わざわざ上京されていたのにお詫びも出来なかつた。

弟マサベールは卒業間際教練をさぼつて、芝居をやつて停学を食つたが、それでも勉強は一応やつていたと見えて、主計見習尉官に合格して家族は善んだ。(当時、主計になるということは、戦死することが少いということもあつた)中尉仕官の時神奈川県相模工廠に勤務し、外地や船に乗つた人の羨望のまゝになつていた。それが終戦の七日前、機銃掃射の一光でたおれてしまつた。そんなものなためだ。個人や家族が個々に安全をねがつたり、ようこんだりしていても、戦争という物理的悲劇的現象は、有無をいわさずおし流していつてしまふ。そしてそれに対する抵抗は、個人の願望やら、祈りやら、不平のつぶやきというものは全く何もならないのだと、思わされたものだ。

明星三十年の歩みをふり返りつつ、これからの子供達にあの不幸をふたたびくりかえさせぬために、わずか

でもよいから手をとらあつてつとめることが、せめて大人の、前の戦争悲劇に對し何もなし得なかつた大人の贖罪ではないだろうか。



成果は偶然に生れない

山本 茂

(大正十三年五月十五日、明星学園開校の式典は入学式を含めて行われた。

あいにくの雨を平ぶきの屋根はしのぎかねて、式壇はぬれるにまかされた。

参列の子供達の、親たちの、来賓の頭から頬をつたつて涙は床をぬらした。

でもみんなの顔はかがやきにあふれていた。これは学園二十五周年の記念誌「明星」に照井猪一郎先生が、「誕生ものがたり」と題し発表された思い出話の一節である。

なんという悲壮な開校式であらう。なんという感激な入学式であらう。

親も子も、来賓も先生もみんな、頭から大ふぬれになつて、その

中三 塚田

雲で床がながれぬれたという。五月十五日の入学式がすでにおくれている。しかも半できの学舎の中で、入学式をあげねばならぬ苦痛の事情などと思つとき、今日めでたく二十周年を迎えるわれわれPTA会員として弟と感激を新たにせずにはいられないではないか。

開拓者のこの思い出さず、われわれにとつてまさに金字塔そのものである。

学園の創立者は森井米吉(現理事長) 照井清一郎(現小中校長) 照井げん(現教員)と山本徳行(昭和四年退版)の四人の先生だけだといふ。(集まつた子供は一年二年三年の三学級をあわせて男女二十一名—これが明星学園発祥の種)だとも書いてある。

忘れてはいけなない。先生四人と子供二十一名。これがわが明星学園初代の姿であることだ。

考えてみると、この二十一名にしても、当時としては容易に集め得た人数ではなかつたのではあるまいか。その証拠といつてはすこしおかしいが、先生の文中に

「おんなとこに学校をつくつたつて子供なんが入るものか」と親しい友だちまでがいつた」と露骨に書いてある。

それが今日、高校、中学、小学の三校を一校内に包設し、生徒児童教員千名を突破、販買だけでも五十名を超え、東京都内の私立学校中、一方の雄として自他ともに認める「明星

となつたのである。われわれ父兄としても感慨無量、況んや開拓者諸先生においでやおやであらう。

すれば、どうしてこの今日の大成果をかち得たか、お互に二応真剣に考えてみねばならぬことではあるまいか。

もちろんそれは開拓者の絶大なる努力、それを助け

た販買各位の血の

なることは

何人とい

えども異

存をばさ

む余地は

ないの

あるが、



——のゆるぎなき成長と、それを体得した修業生の真価とそれを理解協力した世との協賛である。

今更新米の私にこそ、この三六生命をここに説く必要はないが、あの戦時中、軍人万端、なにもかも絶対主義強制の時代に、自由平等の一端だけを買き通すのにもどんな困難があつたか、われわれ年配のものに

は十分

想像が

つくの

である。

従つ

てその

周に廻

し終始

一貫若

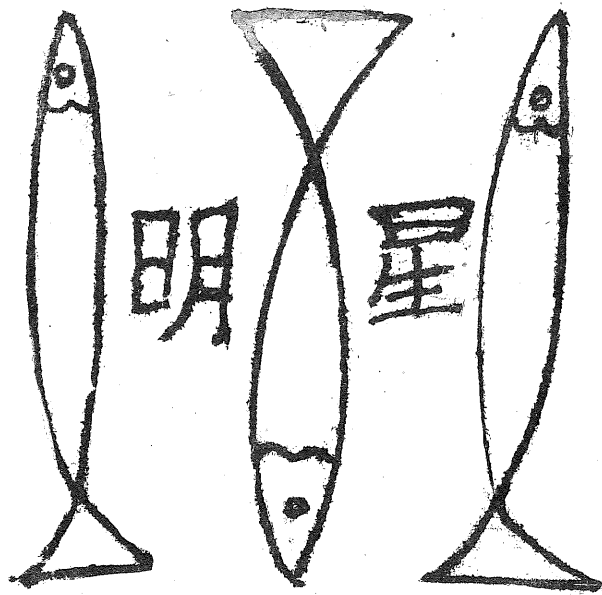
方から「先生お早よう」などと声をかけられると「なぜ敬礼をせんか」とどなることを忘れて、「つう、ようお早よう」と答えてしまふ。と話したことがある。

手裏この教官先生やかましい例の査問のとき、査問官から「氣をつけた姿勢がなつておらん。訓練がたらん。眼がキヨロキヨロしちよる」と叱られたが、昼食懇談のとき、査問官にむかつて「お叱りの通りですが、明星の子供はかわいくてかわいくて自分の子供に向つて号令をかけるよ、ついでに目く行かんですハア」とおどるおどる教明陳列これつとめた。

とあるが、これは即ち柔よく剛を制す、つまり自由平等という軟かく弾力のある明朗教育が如きの如き強権にうちかつたよき例証ではあるまいか。また松本正雄氏も「明星はのびのびしている。明星では子供たちを既成の権威というふうなものの中にびくびく、ペコペコさせないで(中略)めいめいの考えをのびす(中略)教育の大切な役目は子供たちを正しい説をつらぬく信念と勇氣をもつ人間になれるようにすることだ」と書きましている。

なおまた、照井清一郎先生は当時の苦痛を物語るが如く、

(その頃の社会にも家庭にも学校にも、子供の世界はせまかつた)と嘆いていられる。と同時に「人はだれでも自由であり平等でなければならぬ」といふことは子



新 津 哲

供たちの上に無条件であてはまる
と主張し、かつ
(子供の個性は人権としても人格
としても絶対に尊重するべきだ)
と決然とい、切っているのは如何に
先生の決意のほどが堅かったか想像
できるではないか。
また先生は明星教育の実践方法の
一端を示し次のように述べておられ
る。
○学級の行荷はまわり当番制だか

ら級長も副級長も必要はない。
○学習は一人一人が要求された条
件にかなえばフルなのだから、判
定による成績の順位などいらない。
修業式はあつても優等も落才もな
い。
○運動会には賞品も優勝旗もない。
奉仕はむくいが目的でないから、
殊更に表彰する規定もないかわり
に、子供をゆづつにする罰則も
ない。

○学園を象徴するものは帽章のほ
かに制服もない。

「かくてはじめて強く——正しく
朗かな教育ができる訳ではある
が、しかし果して、世人(生徒や父
兄ら)がそれをいかに理解納得した
か、学園成長の二因はそこにもあつ
たと考えねばならぬ。
それについて有名人坪田義治氏は
つぎのような感想をのべている。

(長男が明星中学に入学したのは
今から二十年も昔となるようであ
る。そして三年おいて、次男
と三男がつづいて御厄介になりま
した。恐らく十年くらいの間、子
供達がつづいて明星学園に通つて
いたわけでありました。)(廿五
周年「明星」誌上)

と云っているが、学園の教育方針が
納得ゆかずして愛児三人もつづいて
入学せずとと教育に無方針な坪田氏
ではないと思う。
またこの学園の卒業生青木ふみ子
さんは

(卒業式前の二三日、単立ち
を控えたヒヨコさん達の羽目をほ
ずしたおしやべりや「何か書いて
下さい」のおねだりで、それはそ
れはにぎやかなことでした。終戦
後になつて急に民主化とか言つて
ざわいでいる学校に、明星の初め
からのこの風景をみせてあげたい。
と自信たつぷりな理解ぶりを御披露
かと思うと、武者宗一郎氏は(なん
と云つても明星はやっぱりいい学校

だと思つたのは卒業してからでした)
と後味のよさを告日し、古谷綱武氏
も

(私は明星が好きです。なぜなら、
明星は夢のある学校だからです。
どんなに完備している学校でも、
夢のない学校には躍動する生命が
ありません。生命のない学校には
ほんとうの意味での教育の力があ
る筈はありません。夢こそ活力の
源泉です。)

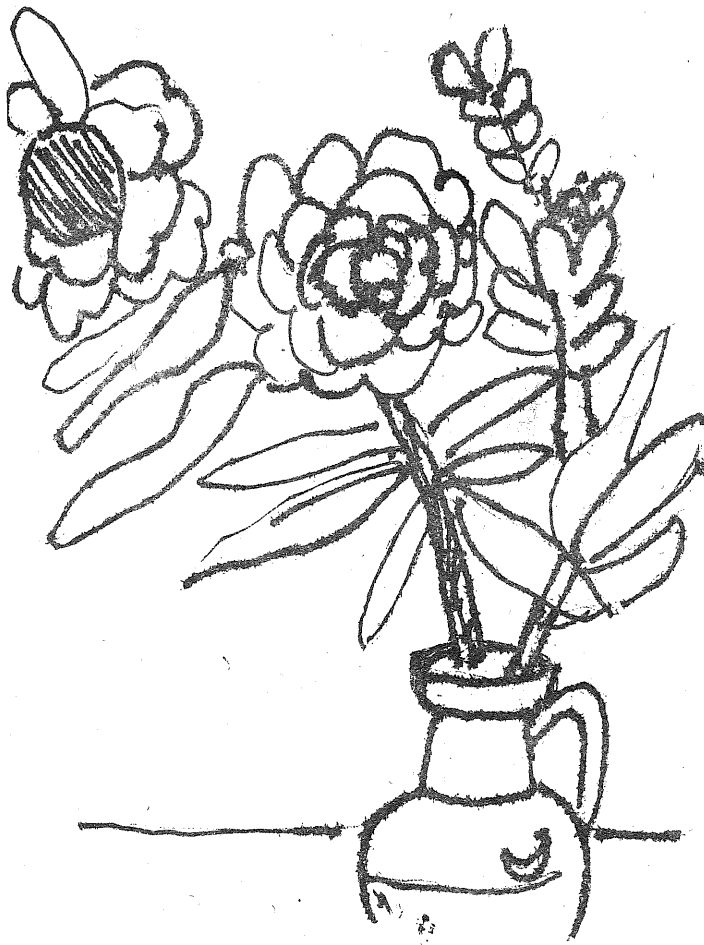
と学園に対する深い理解を美しい夢
のことばでいい現わしている。また
松本正雄氏も(私の家では明星の卒
業生を二人出している(中略)私は
明星をまるで自分の学校のように思
っている)と学校即家庭といつたよ
うな近親感を表明し、越田辰次郎氏
は

(明星はのんびり学校だといわれ
る。その通りだと思う。
明星の生徒は学生らしくないとも
いわれる。私はそれもその通りだ
と思う。

だがそれでよいのではないか。私
はそんな非難めいた言葉を聞く度
にそう思つていた。今もそう思つ
ている。

こざかしい学生、先生を恐れる学
生、詰め込まれに慣れて、考える
ことを忘れた学生、そんなのこそ
いくら学校の勉強ができて何に
もならぬ。)

と奥に蘊蓄のある理解のことばをか
かけて明星礼賛に終始しているよう
だし。(いづれも廿五周年記念誌か



上 村 和 夫

らとる) 最近では黒田龍馬氏(高一の父兄)が(明星は個性を伸してゆくために、家庭と一体になつて貞剣に努力しておられる)と理解と感謝を同時に述べておられる。(会報十七号)

とにかく、一度明星に因縁し、その教育の温手につれ、真髓を知つたものは、いづれも口をそろえて、明

星教育の理解者となり協力者となつて感謝のことはを平直に述べていることは以上の事実によつて最早や明瞭であると思う。この理解と協力こそ他の要素と相まつて学園今日の大を築きあげた一因だといつて過言であらうか。(中一の二の父・五、一四)

明星つ子

小山 力子

(小二の母)

「明星精神」とは書くこともでき得ず、と云つて、どう話していいかわ

からない。

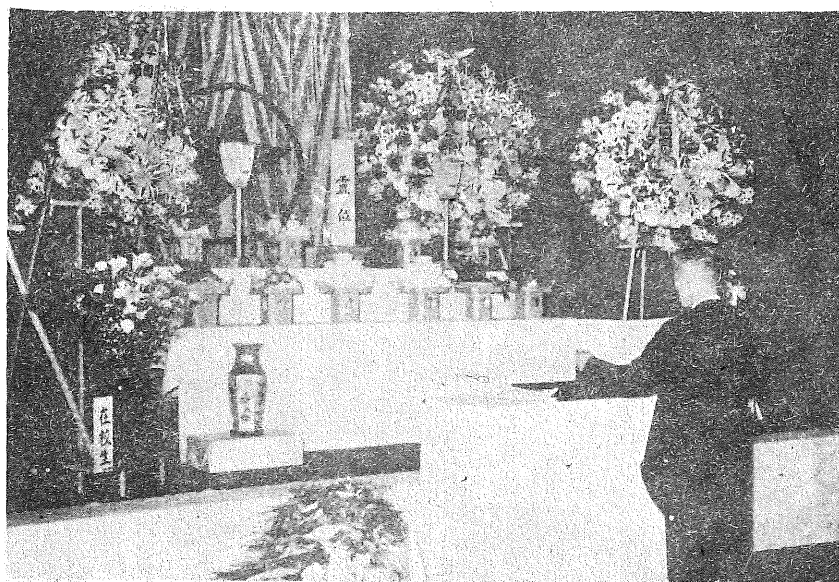
昨年次男が公立の小学校へ三ヶ月程在学して「子供の教育」そして明星つ子の良さを知りました。

学生帽に草履袋、給食袋と毎日七つ道具をスラスラ下げて、その上、鼻の下にはチヤンと鼻水を垂して帰つて来る姿を見ると、母の心も、教育の二字も上の空になり腑でした。一人の母から生れて、明星在学の長男は、誰にも好かれるシッカリ縮んだ口元で、すなおにスクスクのびて行く明星つ子。

二人の子供を見ては憫んでおりました。

お隣様で次男も。昨年十一月、明星に転校して、兄弟が制服姿で登校するうしろで思わず目頭が熱くなりました。あれから半年余、あの頃の次男が近所の男子と遊んだチヤンバラゴッコの棒の刀は、庭の垣根のたしになつて、用がなくなつています。「タダイマ」の大きな声が聞えて姿が見えず、風呂場の中で自分のハンカチ・靴下など洗濯するのが日課になつて、近所の子と遊ぶ時間がなくなりました。「良い子になつたわね」思わずもらします。

帰校後、客間の中で兄弟が野球をしても、母の心の中はよろこびでいっぱいです。



追悼文を読む照井校長

慰霊祭のありさま

物故した後援者・転員・卒業生・在学生の要をなぐさめてあげようとすゝ祭典は、三十周年式典に先立つ同日の午前十時から小・中学校講堂であげられた。

祭壇の正面中央には、白地に赤色の明星旗がさがり、そのすぐ前に「霊位」と見事な筆蹟で書いた白木の位牌がたてられ、その両側にやはり白木の燈明が静かな光をなげている。また白布に包まれた祭壇の両側には「転員一同」「PTA」「同窓会」「在校生一同」と名札のついた花環や生花が順序よく並び立ち、いとも厳肅な静謐な品位香る祭壇であつた。やがて時来るや、小笠原先生のピアノによつて「みたまうけよ」の合唱が高校女生徒によつてはじまつた。追悼文が赤井理事長、照井・上田両校長の順でつぎつぎに朗読されると、遺族席からすすり泣きの声がどこからとなく湧いてくる。

静かな音楽がどこからとなく式場に流れこむ。供花の儀式がはじまる。遺族から学校側、PTA代表と一人づつ祭壇へ供花を捧げるのである。それらも男には白リボンのついた神、女には赤リボンを結んだ菊花といつたように実に行届いた用意であつた。その間に幾回となく「越天樂」その他の合唱や静かな音楽が繰り返され

た。

こうして祭壇の献酬にピツタリマツた音楽の音が慰霊祭として奥に甲分のない雰囲気をもたせ、筆者などは平素、音楽に対してあまり関心をもちたが、今日ばかりは音楽の偉大さにシミジミと感じ入った次第である。

供花が終ると十一時半、式はとちた。

参列者はしずかに退場しはじめたが、まだハンカチーフを顔から拭きぬ婦人もだんだんあつた。

みたまよ

うけよ

照井猪一郎作詞

いこ

みたまよ

きたりて

うけよ

われら

つどい

いのりまつる

とうとき

きみの

まもりに

いやさか

このその

参列者のことば

茶郷夫人の感懐

故茶郷基氏は明星学園の発足当時、昭井夫妻両先生の人格に深くうたれ、豫にあつて絶大な援助をつづけられた学園にとつては才一級功労者の一人者としてその功績を表彰されたが、未亡人は謙讓しながら語つていわく、

主人は在世中は明星学園の創立に



故 茶 郷 基 氏

お手伝いしたなど外部の方へは一切洩しませんでした。ことに、こどもに對しては、絶対に秘密にいたしておりました。

明星が今日の発展を見るに至りましたのは全く昭井夫妻両先生をはじめ、御関係の方々が永年にわたり大変な御苦心を遊ばした賜で、主人もどつがの蔭から、今日の盛典をみてどんなにか喜んでゐることでございましょう。

はじめ、学園は先生がたつた四人でしたが、主人はその方々、特に昭

井先生の御人格に接して、あんな立派な人のためなら、自分はどうな御力添えをしても惜しくないと言々申しておりました。

今日は式典の上に御丁寧な慰霊祭まであげて頂きまして、私は胸がこみあげるような嬉しさを感じます。帰りましたら早速、仏壇へ今日の有様を報告いたします。

山之内夫人のことば

主人共十郎が生前にどんなお手伝いをいたしましたか、私などよく存じませんが、今日はまことに厳肅の上もない慰霊祭にあわせて盛大な三十周年式典に参列させて頂きまして、全く胸がつまるようなうれししい思いがいたします。

明星学園には、この三十年間、私の方こそ、こどもについて孫まで総勢十数人も入り代りたち代りお世話になりました。つづけてお礼を申し上げたいのは、こちうからでございます。

井野夫人のお話

私の家では娘がお世話になりました。から孫二人が只今在学中でございしますが、この学校くらい先生と親側と温く手を結びあつて、学校のために尽すところはなさいと思ひます。亡き主人は心から諸先生のお徳を慕つてござるだけのことをしてしたのでし

う。

今日はいろいろお手簡いお取扱ひを頂いて厚く御礼申し上げます。実は私は足が不自由なので今日は出席できなかつたと思つていましたところ、娘が是非行けと申しますので、やつと伺いました。こんな盛大な式典や慰霊祭を目の前に拝見して感懐無量でございます。

藤田敬父談

故藤田瑞穂先生は昭和二十一年四月に中学校に奉職され、二十四年六月に病死され、その間実に熱心に学園のために尽された功績は大変なものがある。なお先生の敬父は学園の経営資金方面にとくに随れた尽力をされた。

今日の日を迎えて胸がつまる思いがいたします。明星がこんなに立派になりましたのは、偏に赤井、昭井、上田諸先生方々のお力と永い間にわたる血の出るようなお骨折の結果であります。息子は途中で病死をして申訳ないのですが、さぞこの盛典左喜んでゐることございましょう。

息子がこの学園卒業以来男男女女がつづいてお世話さまになりました。私一家こそ学園へ感謝しているばかりでございまして、学園のためならどんなお手伝いでも致したい気持ちで一杯でございます。

* * *

内野未亡人に

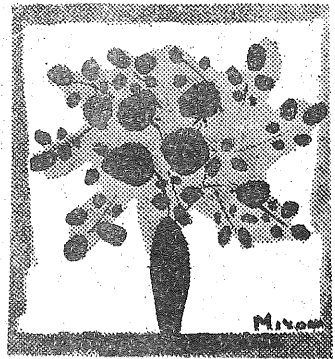
お逢ひして

「額に汗して働きぬいて、二人の子供の元気な顔を見るのが唯一のたのしみです」と仰しやる内野未亡人は、男でさへ荒い社会の社会の波の中に立派に生きぬかれる尊厳のほどがうかがえました。その反面十二文になられた諸蒸服の御新ちやんをおつれになつてやさしいお母さまです。「明星らしい新しい形式の慰霊祭に列席して、十年前の主人のなくなりまして当席が思い出され、感懐無量です。」と十年間の、しかも終戦後のどさくさを子供の成長に生涯をかかれたおいの日々を回想され御様子に、その御苦労のほどがうかがわれ頭のさがる思いでした。

机にむかう生活がほしいとしみじみおつしやいました。これは家庭の雑事に追われる私達のわがいでもあることで、外と内をつかいわけようとなさる御苦心が伺えました。いろいろお叱りいようでしたので皆様の御健康と御幸福をお祈りしておいとまいたしました。

(内野先生は国葬を担当され、主に課外活動に重兵を置かれ、昭和四年から昭和十九年四月十二日なくなられるまで中学校のあはれ坊主の教育に御尽力下さいました。)

(この項富永記)



慰靈祭雑感

本当のところ式が終つてもしばらくの間、私は云うに云えない気持ちに つつまれました。おそらく人の心を あれほどまでおこそかな空気に誘ひ 込んだ式は、明星創立以来なかつた と多くの人は感じたに違いありません。私も勿論そう感じました。そして式の最中に涙をこらえるのがやつとな位でした。ともかく結構な慰靈祭であつたと思います。

があとでふと私はこんな事を感じました。この慰靈祭は何かの喰ひものにされてはいないか?……と。そういうえばさうでもない始まりでした。当事者ばかりは切り切つて……。何とか参列者が浮いた形でしつくりいかなかつたのです。でも私はそんなふうには考えたくありません。明星にはそんな事ないと思うからです。よく世間にある、云いたくても云えない時、何かにかくれて表現したり

相手をやつつたり……明星はそんな弱中ではないと思います。

強く正しく朗かに、と私達は学びました。うれしい時には大声で笑ひ、悲しい時には涙を流し、云いたいことは正々堂々と云ひ、いつも朗かでありたいと思つたのです。たとへどんな世の中に於てでも……。

ですから私はあの慰靈祭を素直に解散したいと思ひます。そしてこんどはもつともつと、多くの人が一体となつて生きてかえらぬまのどくな人を祀つて上げたいと思ひます。再びあの悲劇をくり返さない様にまじめに皆で考え合つて。

私が変に感じたのは私のみわくくれた考え方であつてくれれば良いと思ひます。それならば私だけなおせば良いのですから……。

明星ツ子は皆これからもずっと素直でありたいと思ひますし又、母校も永久に素直さを失わないでほしいと思ひます。(O・B生)

位牌がくもる

慰靈祭の祭場で、上田高校長が追悼文を読んでいるうちに、声がしだいに乱れてくる。ついに泣声となる。追悼文をもつと身体がふるえてくる。遺族席からもおえつの声がしだいに高くなる。白いハンカチがあちこちに現われる。筆者の目にも位牌の「慰位」の文字がくもつて見えた。

「慰靈祭日の感想を、お父さま、お母さまに」

○清水いく様、寅夫さん(才八回卒)
戦死。こうしたことをしていただけたことはほんとうにありがたいことで、當時を思い出して感無量。

先生方のお元氣なお姿と、お顔を拝見させて頂いてうれしかったです。ますます明星が今後栄えていきますように。と泣きはらしたお目を牌がしてお話しになりました。

○荻野様、秀盛さん(才七回卒) 飛行列死。卒業生があつまり心からの慰靈祭をして頂き、感謝に耐えぬ。創立当時の赤井先生もおみえになり、ほんとうにうれしかった。

○佐藤様、隆さん(才七回卒)
感謝に耐えない。

○菅原様、基さん(才十四回卒) 戦病死。

上田先生には一方ならすお世話になつていた。一人息子で、泣けて泣けて。同級生の方がみんな大きくなつて三十一位。太つて、精けないうち、羨しいやら。つい編纂子も、もらい泣きしてしまいました。

○伊藤様、真幸さん(十三回生)
御長男で戦病死。

ごていねいにして頂いて、胸が一杯。上田先生から同級生にあわせて頂き、戦病死だつたから……せめて戦地へ一足でもふみいれたら満足だつたらうと泣いておられました。

明星に……

萩野

(小五の世)

明星は心のふるさと
それは大切な私の蔵書の様だ
思出はもう大分古びてしまつたけど
ほこりをばたいて胸の奥から
そつととり出してみる

武蔵野の香を一杯に含んだ
あの運動場よ
高い木々の梢よ
暖しい日時計よ
詩人になろうと思えば
誰でも……なれた

誰かきになりたければ
ピカソにも……なれた
又大光明家に在りたければ
その場で……なれた

みんな一緒に喜んだ
みんな一緒に悲しんだ

明星と

学校の屋根の上に広がる雲が空まで

二人の兄の戦死

江川 玄武

(第九回)

私達兄弟の長男は第一回、六男は第十四回卒業です。そこで、皆男ばかりで六人共明星育ちです。一度に五人が明星に通学していたこともあり、戦争が始まると順々に兵隊になり、とつとつ最後はお母にだけが残りました。空襲の日が続いたわけですが、戦争が終つてみると兄弟は四人に減つてました。二人しかおられない息子さんを二人共戦争で亡くされた父兄もおいでになるそうです。私達は六人もいながら二人は空襲で帰つて来ましたが、四人は毛布を背負つて戻つて来たのは不幸中の幸いでも云えましょうか。

しかし親にしてみれば算術で割り切れるものではないらしく、時々夢を見ては私達に話したりします。

長男は絵図きで兵隊に行くのを嫌がつてました。三年目に除隊して来ますと、結構私達兄弟に軍隊生活の話をしたりしますので、私達は「兵隊のなぐる話なんか聞きたくない」と兄の話を嫌がりました。除隊になつてもすぐ召集があるとゆうので、兄は民間会社の外地勤務を希望し、比島のマニラへ転勤して召集の望れに成功しましたが、その内に米軍が上陸したため現地召集があり、結局

間もなくマニラの市街戦で火砲放射器がなんかで壊されられた模様です。戦死した日も場所も殆んど全滅しているのハッキリわかつていません。双男は衆天家なので何とか生きて帰つて来ると云つており、幹部候補生もうまく甲種は落ちて乙種になつたから早く帰れると喜んでましたが大東亞戦争が始まり、日本が敗け始めるや満州から比島へ移され、レイテ島で戦死した様です。双男も何時死んだかはハッキリ致しません。

この二人は運命のいたずらか、双男が満州へ送られた任地の駅のホテルで、長男は三年振りで十分ばかり会い、長男は双男の乗つて来た列車で除隊のため満州から内地へ出発しました。その後長男がマニラの会社にいる時にヒョッコリと会社に双男が現れ、満州からレイテに送られるためマニラに寄つたと云い一時間はかり二人で話して、それより長男はマニラで双男はレイテに送られて死んだわけでは。

三男四男はどうせ軍隊へ行くなら兵隊より士官がいいと海軍の予備学生を志願し、五男は対空部隊へ行きました。六男は拓と云うとどうしても予科練に行くと言つて母を困らした。母は自分でも願書を出しに行きましたが、海軍の兄貴が予科練の悲惨さをあわせて知らせたので、六男も予科練を思い止まり商船学校へ入学。イヤ入隊して、と云うのは商船学校の生徒は海軍生徒として軍籍がありません。士官の卵になつて着着きまし

た。

この様に兄から弟達の事をフドクドと書いて来たのは、同じ明星で育つて来ても下の若者戦争に熱心であつた事をお知らせしたかつたからです。別の言葉で言いますと、軍国主義教育(学校だけのことでなく)が一応成功したというわけです。あれ程の弱かつた僕男でさへ軍隊生活をして帰つて来たらナケルことが平氣になつたり、私刑の話を面白そうに話したりする様になりました。

目の前でシメ殺した鶏が料理されて出されると食べる氣がしないのが普通の感情でしょう。それを、人間を殺せる精神状態にするため、その精神状態を持続させるための教育が軍隊だと誰かが云つてました。それに戦争は人間の悪い面を平氣で出させます。私の兄達が、私達にはよき兄であつた者が、マニラで子供を刺し殺したり、掠奪したり、おまけにそのあとで平氣で食事したりしたとは考えられませんが、実際にその様なことやそれに似た様なことをした軍人が非常に沢山いることを考えると、その軍人の中に私の兄達を含んでいないと断言出来な(様な)気がします。戦場で婦人子供を焼き殺す様な人間の血の通つてない士官でも家庭では音楽を聞き、自分の子供をあやすのです。その士官は或いは私の、或いは貴方方の兄弟や、天や子供かも知れません。又殺され片貝にされた者も家庭には家族がいることと云うまいしょう。「お父さん、

お母さん、

放課の鐘がなり終つて了つても広い芝生の止からなかなか立ち去れなかつたものだ。あ、明星は心のふるさと!

その頁は大分黄ばんで了つたけれど、そつとほこりをばたいて胸の奥にしまひこむ丁度、私の大切な蔵書の様に……



鉄砲がつかいでよそのお父さんを殺しに行くの?」

私達兄弟は刑務所に入れられても殺人業にならな(い)し。天皇陛下の高などとうゆうことにも欺されな(い)決心を二人の兄の戦死によつて得ました。幸いにPTAの会報を見ました。PもTも子供を平和に育てる様御努力していらつしやるので、この逆コースの在の中でこの会報が実に楽しく読めました。私達卒業生がたどつた戦争——兵士とゆうコースを再び在學生がたどらぬ様、又正しく強く生きてゆく力がつく様にとの先生方と父兄の努力に成功を祈ります。

星に参りて

岩崎允子

晴れとも曇りともつかない日、創立三十周年を祝う日がやって来た。明星に育つた者には印象深いその日に、全ての人が身と心で知っている職のために亡なつた方々への慰霊祭が行われた。入学式、卒業式、劇その他の集会や体操と色々に使われる講堂はいつも、にぎやかなざわめきに満ちていたが、ささやかに祭壇の飾られたその日の講堂の静けさは、明星創立以来のことではなかつたらうか。二回生といえ、小等部一年の人達とは三十年もの間がある。その長い間、又くこともなく続いている明星の児童が、靈前に花を捧げる後姿をみて、創立以来今日に至るまで師弟の間に、先輩と後輩の間にほのぼのとした愛のつながりを考えないわけにはいかない。香の薫た、静寂の中に置かれた位牌は、幾つもの聖なる見え、自分たちの方へはほえみかけ何かを囁き合っている様に見えてならなかった。自分にとつては、忘れられない感謝の日であつたし、その感動の底から再び生命を奪う職を起してはならないと思つたのは命ある自分の卑怯さであらうか？あの戦さへなければ死なずとも済んだ多くの人々のために心から御

冥福を祈りたい。それにしても何故もつと多くの友達が寄りなかつたらう。祈りはおしつけられるものではないが、明星のよさは、皆が腹心から語られ、よろこびあえる素直さではなかつたか？(昭二九・五・一七)



お祝のいっは

黒頭巾

このおめでたき式典に際しなにかからのお祝のことはおくりたいと思つた。ほかの人々のおことは想像すると、どうもこれという変つたことばがでてきません。みんなが同じようなことをいうのなら「おめでとうございます。××生」とごく簡単にいっただ方が、貴重

な語彙をとらないでと思つた。それはあんまりへんでつがないし、何かいいいのが、端わらぬ私の心境であります。

いま私には中学一年生と小学四年女の二人のこともが学園のお話になつていて、入園以来(男児は小学女児は一年の時転入)すこぶる

楽しく朗かに毎日通学していますが、この明朗性が、あるいは明星学園の一特徴ではないかとちがうになつてようやく気付くような生活であります。

その裏付けといつては、少しおかしさが、気付いた奥側二三をあげてみましょう。

こどもらは入園以来ほとんどお友だちや先生方の悪口をいわなくなつた。いや私もがきかなくなつたのです。よほど腹が

立つたとき、肝にさわつたときなどは困つた。困つた。とわめきますから「どうしてそんなに困つたの」ときくと、はじめて真相を打ち明け

るのですが、その面にも他人さまの悪口などはいりません。

それはこども自身の性格なという人があるかも知れませんが、もし親の性格がこどもに伝わるものだとするならば、私という男はがんばり、

白黒をハッキリさせたい自分ですから、場台によるといふ他人の批判もあえて辞さないものであります。

これはキツト明星教育の結果たらうと大いに感謝している次であります。

つぎに近頃私はよく職員室に入出仕ねばならぬ用事をもつようになり、自然、職員室の空気とか、出入する人々の様子とかいつたものを直感するのであります。職員室に入出することでもらの態度はまことに自然、まことに平然としていて、とくに先生

の室に入るといつたような特別な様子は見られません。また室の内外で先生と話している態度も、あたかも兄が叔父叔母に接しているかのような親しみを見るものに与えます。

私たち小、中学校時代(四十年も昔のこと)にはクラスごとに必ず級長とか組長とか云つた官選の特別階級生がいて、それ以外のものは、時に呼びつけられる時とか、叱られる時以外には職員室にはめつたに近寄らなかつたものです。ことに校長室の前を通るときなどオッカすびつくりで足音をしのがせたものです。

この古い古い思想がまだ残っているせい、この学園のこんな風景を不思議に思うのかも知れません。が、人格対等、民主主義という現代的世相において、たしかに理想に近い風景だと思ひます。

また先日のこと。

ある委員会の席上で、昭和校長さんが、こんどの式典に際し、勲級職員諸君になにか感謝の品をおくり表彰して差し上げたいと思つたが、勲級職員の名はいつもきまつてゐるから、

こんどはそれらの人々には感謝状だけを差上げ、職員一同へ一様の記念品をおくりたいと思つたといつた話

品をおくりたいと思つたといつた話

品をおくりたいと思つたといつた話

品をおくりたいと思つたといつた話



まされた。そのときそばで、それを見ている他の先生「それもいいでしょう。私らだけ記念品を貰うとまただから、却ってマイナスになりますからね」と頷る。朗かな応酬がそれをきいていた私ども、なんという朗かな学校だろうと感じ入った訳であります。

この明朗性こそ明星教育のうえに好影響をあたえ、学園の特徴を形づくる所以であらうと思いました。

明星学園の入学案内書には、なるほど

◇個性尊重 ◇自主自立 ◇自由平等が学園の教育方針で、強く――正しく――朗らか、がそのモットーだと明かに書いてあり、うべなるかなといまさらながら思いあたりました。

P.T.A会報の編集責任をもちわれわれとして今後は一層高くこのモットーをにかけて各自の責任を果たして行きたいと心に節じたこの心持をそのまゝ、創立三十周年のお祝いのごとばとしておくります。(五・一五)

みたままつり

照井猪一郎作詞

(一) 森しずかなる むさしのに

たてしわれらの まなびやを

まもりたてし なき人の

いさおは とわに かがやかん

(二) のともにもえし おしえ子が

いく年月を このそのに

まなびて うせにし おもかげを

しのびや今日の たままつり

(三) いくさのにわに いでゆきて

かえりきまごめ わこつどの

みたままをわかれ いまここに

なごごめつる かしこさよ。

編集後記

○新しき仕事に入りぬ学園の姿を見度くこころ知り度く。編集という勤め仕事その中に新しき友との人の和を見つ(庵地)

○未經験な私が編集部員になつて第二号目、三十周年記念特集号の編集当番にぶつかり、皆様に引きづられ、どおにかお手伝いさせて頂いたと云うのが本音。お手伝を終えて、ようやく編集部員らしい気もして来ました。(矢永)

○子沢山の故にお断りしていた役員を、今年はずめて、それも編集は大変よ」と云う声におびやかされつつ、おそれる顔を出した部会には、和気あいあい、お隣席にて原稿が多過ぎて悲鳴をあげる始末に本當に堪へていきました。(ともだ)

○山と積まれた玉稿の中で、武者小路先生御一人御奮闘。何から何までもお願いしてしまつて我々素人は唯なんとなぐ手と口を動かすのみ。それでも私達の力で出来たる会報の榮しみな事。(こばやし)

○編集という初めての仕事にたづさわりの、その大変なのに今更書くばかり、殊に三十周年特集号というので皆様から沢山の玉稿を頂き、書きうつしながら、何だか久しぶりに、学生生活に入つた様子を覚えました。中央

○あれやこれや、これとあれと、無い知恵をしぼつたフランクも、結局は力及ばず以上の様な特集号となりました。この号では特に割付当番の方が何度もお集りくだつて有難うございました。おかげさまで原稿はたつぷり集まり演劇関係でお忙しい武者小路先生に又もや大変なお骨折りないただきました。御多忙の中をこの号のために玉稿をお寄せ下さいました各方面の方々に、厚く御礼申し上げますと共に、今後とも、折々の御感想などお寄せいただきたく御願申し上げます。(昌永)

○割付をお済みさうけたものの、原稿が多いのと、演劇をひかえていたため、粗組だけ終えた所、今度は母の急死で仕事を果さず、他の先生にお願いしました。お許し下さい。(武者小路)

○三十周年を祝う特集号をここに贈る部員一同の心持は、山と積まる玉稿にうれしい悲鳴をあげながら元氣一ぱいである。が春の日長くなつたと云えもう暮れかけた。なんだか心残りのものを覚える。(しげる)

